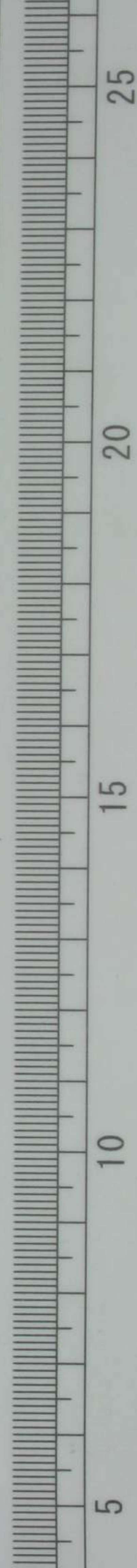
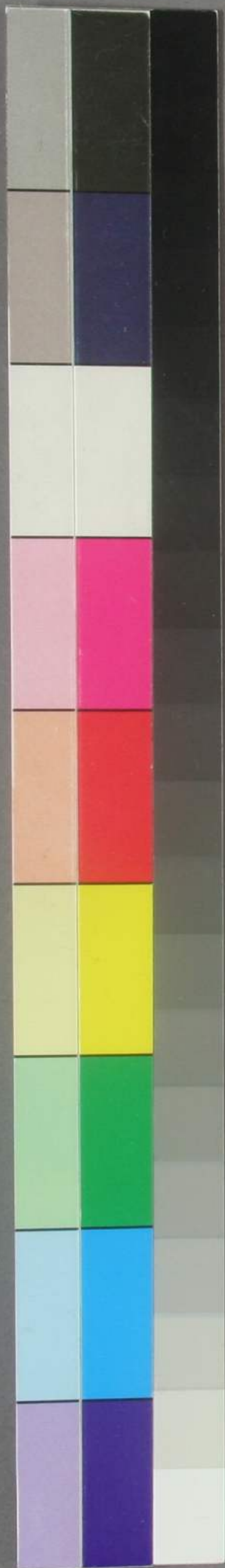


改 巽

赤光

齋 藤
茂 吉

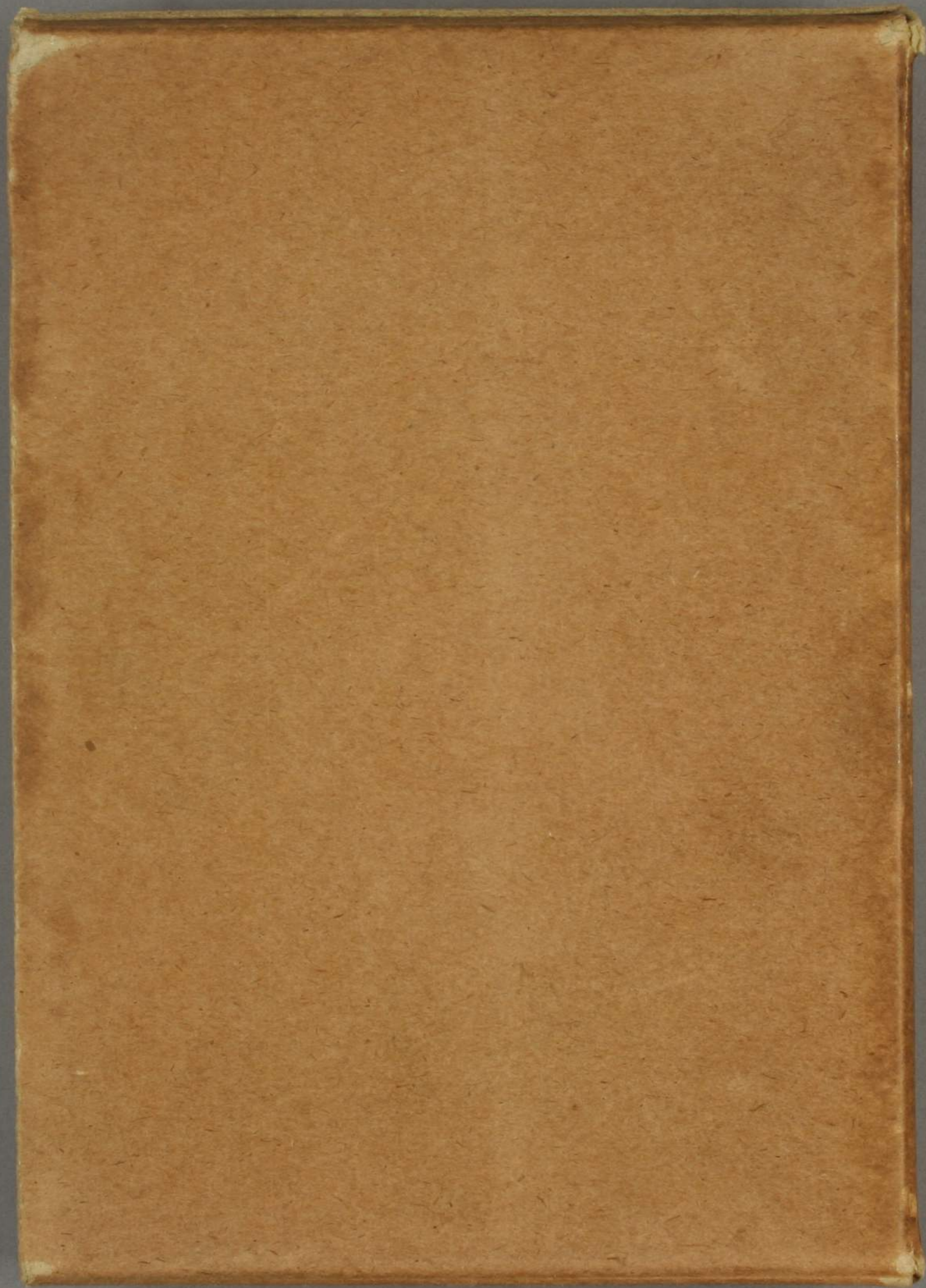


歌集

改選

赤光

齋藤茂吉



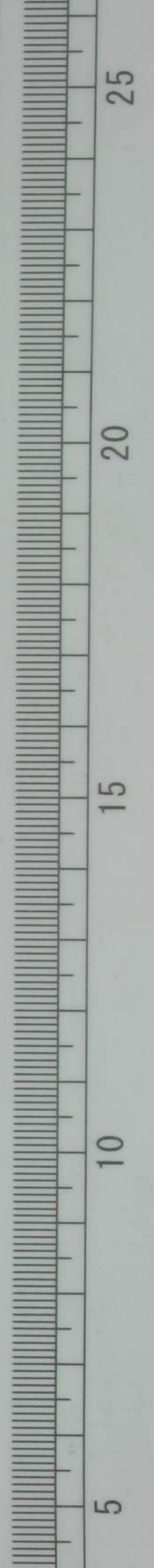
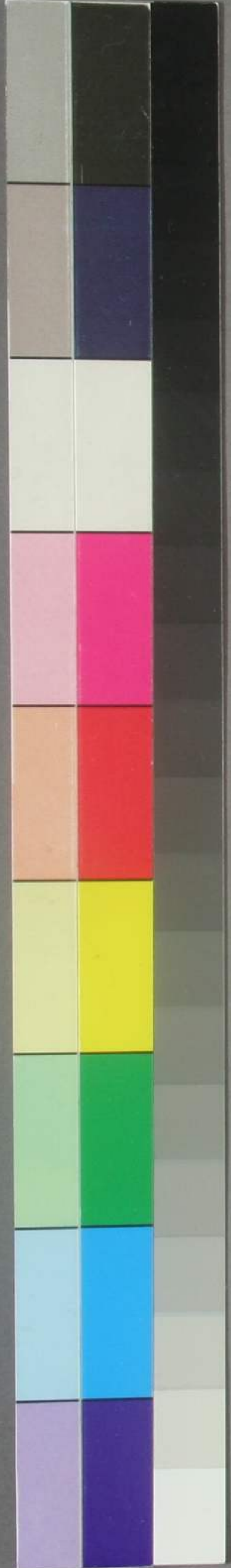
改選

赤光

齋藤茂吉



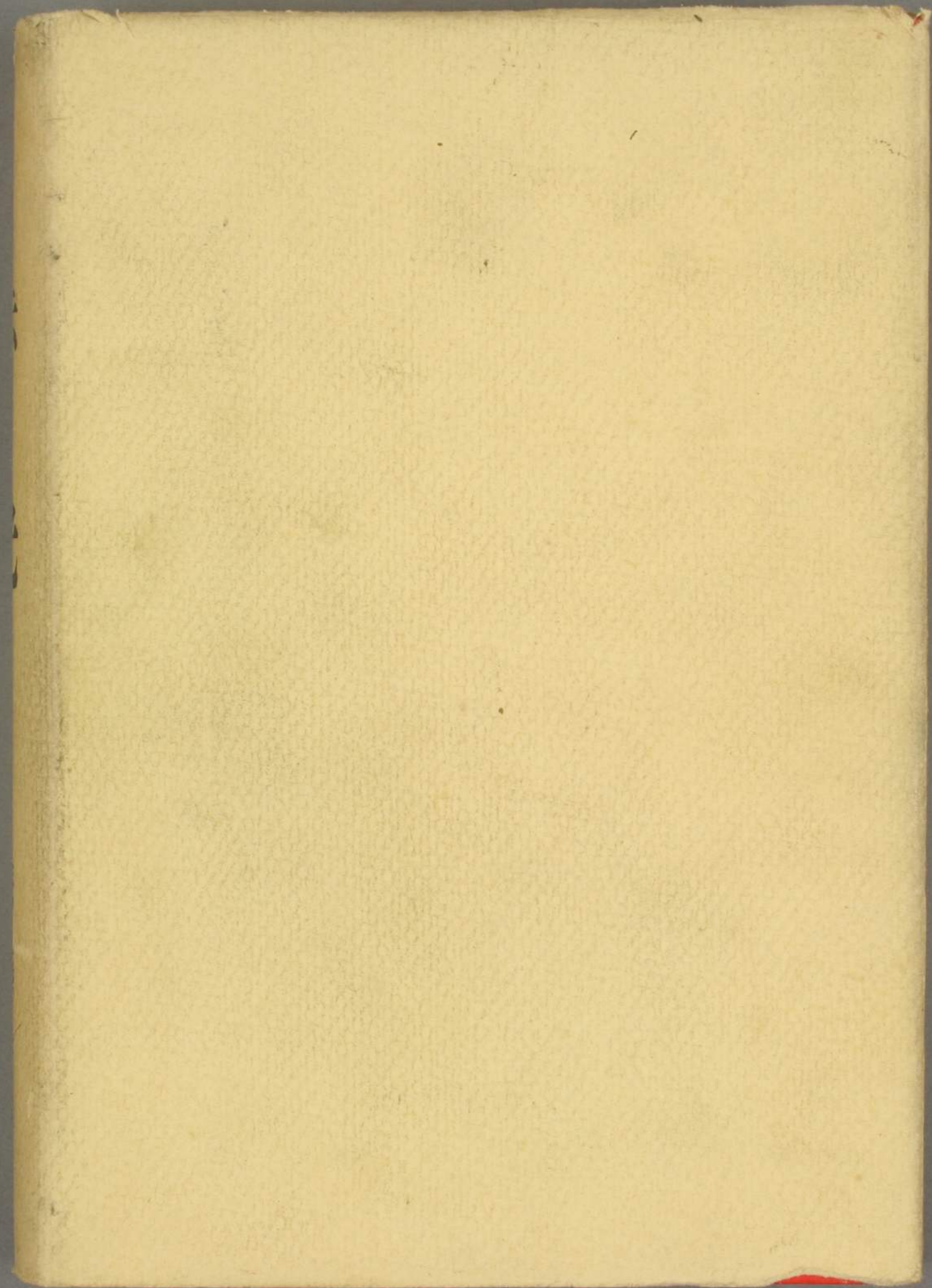
東京春陽堂出版



歌集

赤光

齋藤茂吉



歌集

赤

光

齋藤茂吉

選 改

光 赤

吉 茂 藤 齋



版出 堂陽春 京東

50

55

60

65

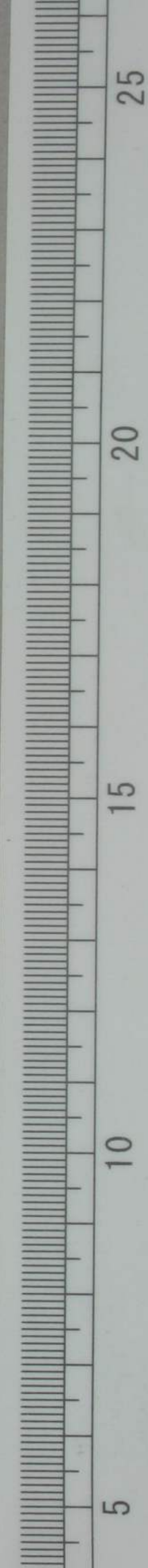
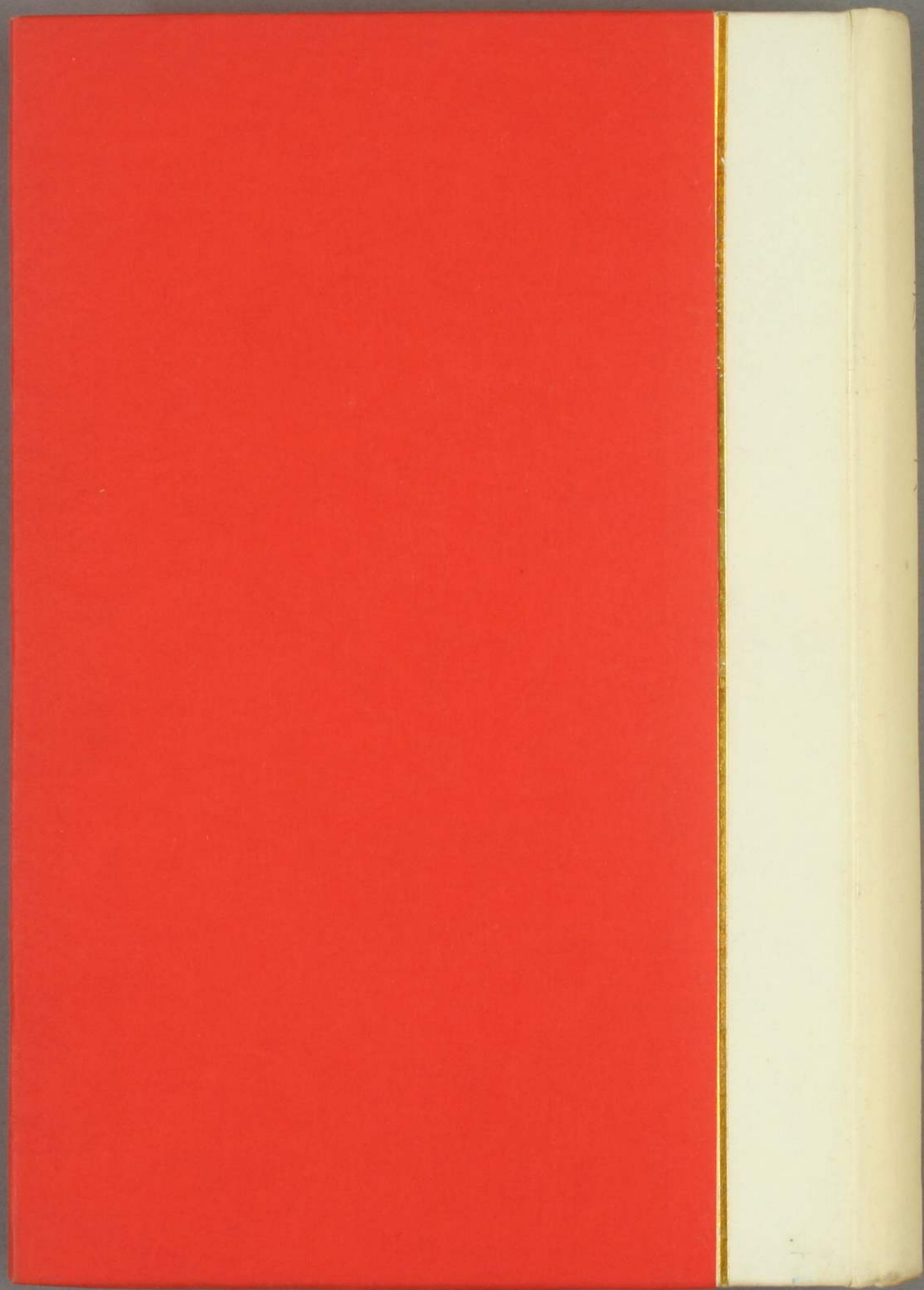
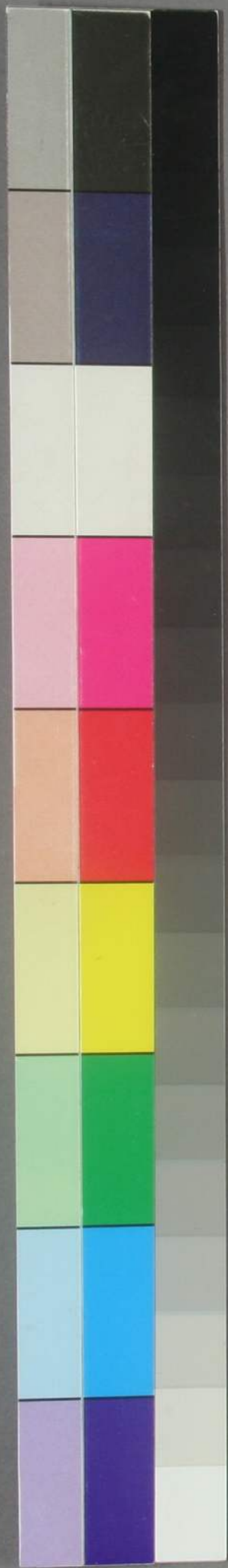
70

75

80

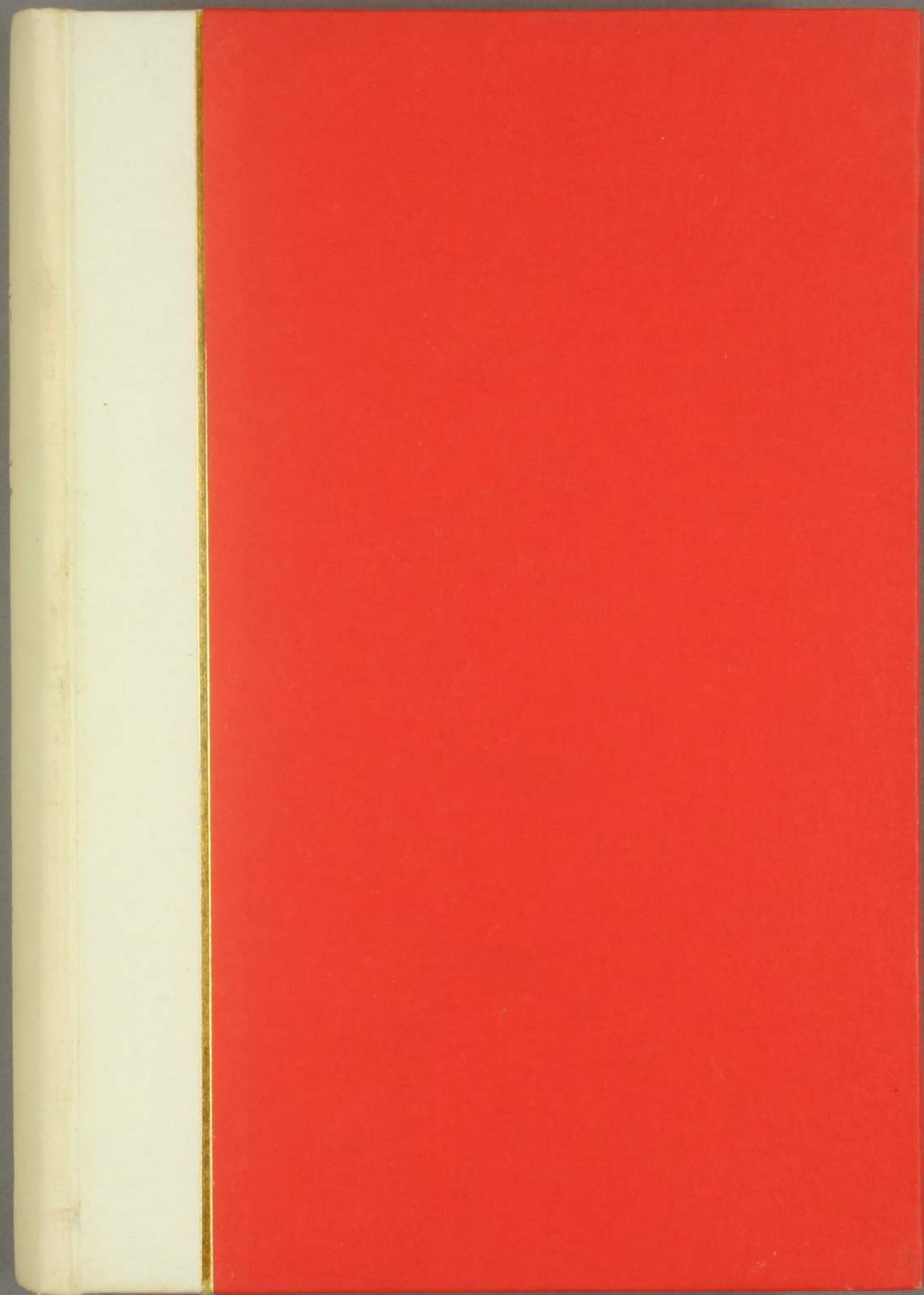
85

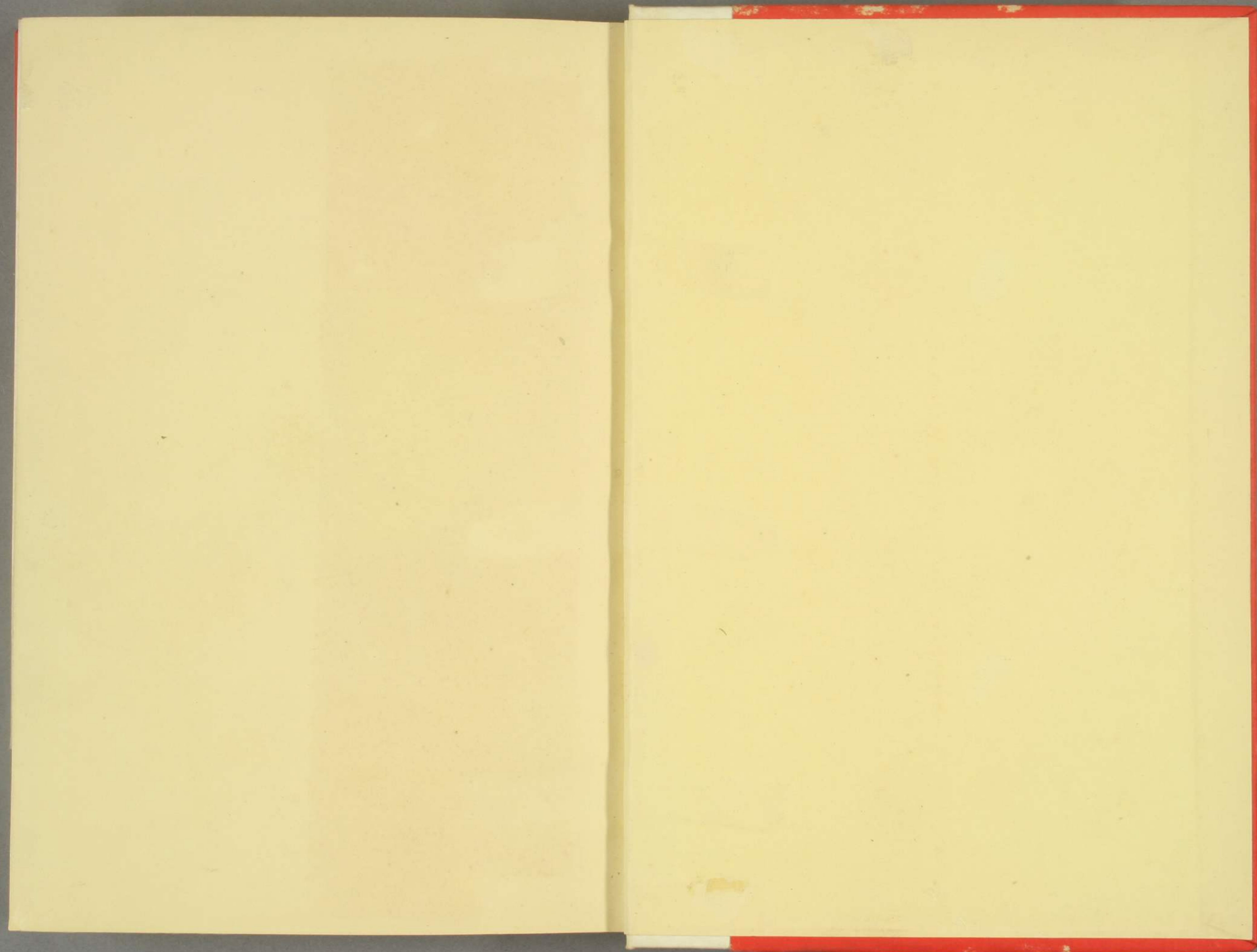
90



歌集
赤
光

齋藤茂吉





齋藤茂吉著

アララギ叢書第二編

歌集

改選

赤

光

東京 春陽堂發行

齋藤茂吉著

アララギ叢書第二編

歌集

改選

赤

光

東京 春陽堂發行

赤光目次

自明治三十八年至明治四十二年

1	折に觸れ (十七首)	三
2	地獄極樂圖 (十一首)	九
3	螢と蜻蛉 (五首)	一三
4	折に觸れて (二十首)	一五
5	蟲 (八首)	一三
6	雲 (十四首)	一五

7 蒔しほ (八首) 三〇

8 留守居 (八首) 三三

9 新年の歌 (十四首) 三六

10 雑歌 (十一首) 四一

11 鹽原行 (四十四首) 四五

12 折に觸れて (二十首) 六〇

13 細り身 (三十四首) 六七

14 分病室 (四首) 七九

明治四十三年

1 田螺と彗星 (八首) 八三

明治四十四年

2 わさな妻 (十一首) 八六

3 悼堀内卓 (七首) 九〇

1 此の日頃 (八首) 九六

2 おくに (十七首) 九六

3 うつし身 (十七首) 一〇四

4 うめの雨 (二十首) 一〇〇

5 藏王山 (八首) 一〇七

6 秋の夜ごろ (十七首) 一一〇

7 折に觸れて (廿首) 一二六

大正元年

1 陸岡山中(十一首)……………一三五

2 木の實(八首)……………一三九

3 或る夜(八首)……………一四二

4 木こり(八首)……………一四五

5 犬の長鳴(五首)……………一四八

6 さみだれ(八首)……………一五〇

7 折々の歌(二十六首)……………一五三

8 夏の夜空(八首)……………一六二

9 土屋文明へ(八首)……………一六五

10 狂人守(八首)……………一六八

11 海邊にて(廿首)……………一七一

12 郊外の半日(十七首)……………一七八

13 葬り火(廿首)……………一八四

14 冬來(十四首)……………一九一

15 柿の村人へ(十首)……………一九六

16 ひとりの道(十四首)……………二〇〇

17 青山の鐵砲山(八首)……………二〇五

18 折に觸れて(八首)……………二〇八

19 雪ふる日(八首)……………二一一

大正二年

20 宮益坂 (二首) 二四

1 さんげの心 (十七首) 二七

2 根岸の里 (八首) 三三

3 きさらぎの日 (八首) 三六

4 神田の火事 (五首) 三九

5 口ぶえ (五首) 三二

6 おひろ (四十四首) 三三

7 死にたまふ母 (五十九首) 三九

8 みなづき嵐 (十四首) 三七

9 麥奴 (八首) 三五

10 七月二十三日 (五首) 三八

11 屋上の石 (八首) 三六

12 悲報來 (十首) 三三

13 先師墓前 (二首) 三七

挿畫

蜜柑の收穫……………木下奎太郎氏

彫刻……………伊上凡骨氏

通草のはな……………平福穂氏

三色版……………田中製版所

佛頭……………木下奎太郎氏





挿畫

佛頭	三色版	通草のはな	彫刻	蜜柑の收穫
.....
木下奎太郎氏	田中製版所	平福百穂氏	伊上凡骨氏	木下奎太郎氏

自明治三十八年
至明治四十二年



1 折に觸れ 明治三十八年作

霜ふりて一^{ひと}もと立^たてる柿の木
の柿はあはれに
黒すみにけり

浅草の佛^{ほとけ}つくりの前
來れば少^{せう}女^めまほしく落^{いり}日^ひ
を見るも

書よみて賢くなれと戦場のわが兄は錢を呉れ
たまひたり

戦場の兄よりとどきし錢もちて泣き居たりけ
り涙おちつつ

馬屋のべにをだまきの花とぼしらにをりをり
馬が尾を振りにけり

眞夏日の畑のなかに我居りて戦ふ兄をおもひ
けるかな

はるばると母は戦を思ひたまふ桑の木の実の
熟める畑に

たらちねの母の邊にゐてくるぐると熟める桑
の実を食ひにけるかな

熱いでて一夜寝しかばこの朝け梅のつぼみを
つばらかに見つ

春風の吹くことはげし朝ぼらけ梅のつぼみは
大きかりけり

桑畑の畑のめぐりに紫蘇生ひて断りて居れば
にほひするかも

入りかかる目の赤きころニコライの側の坂を
ば下りて來にけり

寝て思へば夢の如かり山焼けて南の空はほの
赤かりし

さ庭べの八重山吹の一枝散りしばらく見ねば
みな散りにけり

數學のつもりになりて考へしに五目ならべに
勝ちにけるかも

かたむく日すでに眞赤くなりたりと物干に出
でて欠せりけり

ゆふさりてランプともせばひと時は心静まり
て何もせず居り

2 地獄極樂圖

明治三十九年作

淨玻璃にあらはれにけり脇差を差して女をい
ぢめるところ

飯の中ゆとろとろと上る炎見てほそき炎口の
おどろくところ

赤き池にひとりぼつちの眞裸まはだかのをんな亡者まうじやの
泣きゐるところ

いろいろの色の鬼ども集りて蓮はぢの華はなにゆびさ
すところ

人の世に嘘うそをつきけるもろもろの亡者まうじやの舌を
抜き居ゐるところ

罪計つみはかりに涙ながしてゐる亡者まうじやつみを計れば巖いはほよ
り重き

にんげんは牛馬うしうまとなり岩負ひて牛頭馬頭ごづめづめども
の追ひ行くところ

をさな兒の積みし小石を打くづし紺こんいろの鬼
見てゐるところ

もろもろは裸はだかになれと衣ころも剥はぐひとりの婆ははの口
赤きところ

白はき華はなしろくかがやき赤あき華はなあかき光あを放はなち
ゐるところ

ゐるものは皆みなありがたき顔かほをして雲くもゆらゆら
と下おり來きるところ

3 螢と蜻蛉

明治三十九年作

蠶この部へ屋やに放はなちし螢あかねさす晝ひるなりしかば
首くびすぢあかし

蚊帳あしひらのなかに放はなちし螢あ夕ゆふさればおのれ光ありて
飛とびそめにけり

あかときの草の露玉七いろにかがやきわたり
蜻蛉うまれぬ

あかときの草に生れて蜻蛉はも未だ軟らかみ
飛びがてぬかも

小田のみち赤羅ひく日はのぼりつつ生れし蜻蛉
もかがやきにけり

4 折に觸れて

明治三十九年作

来て見れば雪消の川べしろがねの柳ふふめり
藨の臺も咲けり (草春二首)

あづさゆみ春は寒けど日あたりのよろしき處
つくづくし萌ゆ

生きて來し丈夫がおも赤くなり踊るを見れば
嬉しくて泣かゆ (凱旋二首)

凱旋り來て今日のうたげに酒をのむ海のます
らをに髯あらずけり

み佛の生れましの日と玉蓮をさな朱の葉池に
浮くらし (佛生會二首)

み佛の御堂に垂るゝ藤なみの花のむらさき未
だともしも

青玉のから松の芽はひさかたの天にむかひて
竝びてを萌ゆ (若芽二首)

はるさめは天の乳かも落葉松の玉芽あまねく
ふくらみにけり

みちのくの佛ほとけの山のこごしこごし岩いは秀ほに立ち
て汗ふきにけり (立石寺一首)

天あめの露つゆおちくるなべに現あらわし世よの野のべに山やまべに
秋花あきばな咲けり

涅槃ねはん會えをまかりて來れば雪ゆきつめる山やまの彼かなた方に
夕ゆふ燒やきのすも

小瀧こたきまで行ゆき著つきがてにくたびれし息いきづく坂さかよ
山鳩やまとびのこゑ

夕ゆふひかる里さとつ川がは水みづ夏なつくさにかくるる處ところまろき
山見やまみゆ

淡青たんじやうの遠とほのむら山やまたび來きつるわが目めによしと
寢ねつつ見みにけり

火の山を繞る秋雲の八百雲をゆらに吹きまく
天つ風かも (藏王山五首)

岩の秀に立てばひさかたの天の川南に垂れて
かがやきにけり

天なるや群がりめぐる高ぼしのいよいよ清し
山高みかも

雲の中の藏王の山は今もかもけだもの住まず
石あかき山

あめなるや月讀の山はだら牛うち臥すなして
目に入りにはけり

病癒えし君がにぎ面の髯あたり目にし浮びて
うれしくてならず (藤真氏病癒ゆ)

5 蟲

明治四十年作

花につく赤小蜻蛉もゆふされば眠りにけらし
こほろぎのこゑ

とほ世べの戀のあはれをこほろぎの語り部が
夜々つぎかたりけり

月落ちてさ夜ほの暗く未だかも彌勒は出でず
蟲鳴けるかも

ヨルダンの河のほとりに蟲鳴くと書に残りて
年ふりにけり

てる月の清き夜ごろを蟋蟀やねもころころに
率寝て鳴くらむ

きのふ見し千草もあらず蟲の音も空に消入り
うらさびにけり

あきの夜のさ庭に立てば土の蟲音はほそほそ
と悲しらに鳴く

なが月の秋ゑらぎ鳴くこほろぎに螻蛄も交り
てよき月夜かも

6 雲

明治四十年作

かざろひの夕べの空に八重なびく朱の旗ぐも
遠にいざよふ

岩根ふみ天路をのぼる脚底ゆいかづちぐもの
湧き卷きのぼる

藏王の山はらにして目を放つ磐城の諸嶺くも
湧ける見ゆ

底知らに瑠璃のただよふ天の門に凝れる白雲
誰まつ白雲

岩ふみて吾立つやまの火の山に雲せまりくる
五百つ白雲

遠ひとに吾戀ひ居れば久かたの天のたな雲に
鶴とびにけり

あめつちの寄り合ふきはみ晴れとほる高山の
背に雲ひそむ見ゆ

八重山の八谷かせ起る時のまや峽間みなざり
て雲たちわたる

たぐひれのかげのよろしき妹が名の豊旗雲と
誰がいひそめし

小旗ぐも大旗雲のなびかひに今し八尺の日は
入らむとす

いなびかりふくめる雲のたたずまひ物ほしに
のぼりつくづくと見つ

ひと國をはるかに遠き天ぐもの氷雲のほとり
行くは何ぞも

雲に入る薬もがもと雲戀ひしもろこしの君は
昔死にけり

ひむがしの天の八重垣しるがねと笹べり耀く
渡津見の雲

7 菊しほ

明治四十年作

秋のひかり土にしみ照り菊しほに黄ばめる小
田を馬の來る見ゆ

竹おほき山べの村の冬しづみ雪降らなくに寒
に入りけり

ふゆの目のうすらに照れば竹群は寒々として
霜しづくすも

窓の外に月照りしかば竹の葉のさやのふる舞
あらはれにけり

霜の夜のさ夜のくだちに戸を押すや竹群が奥
に朱の月みゆ

竹むらの影にむかひて琴ひかば清搔すがにしも弾ひ
くべかりけり

月あかきもみちの山に小猿ども天あまつ領布ひなど
欲ほりしてをらん

猿の子の目のくりくりを面白み日の入りがた
をわが加へるなり

8 留守居

明治四十年作

まもりゐる縁えの入日に飛びきたり蠅はが手を揉も
むに笑ひけるかも

留守居して一人し居れば青光あをひかる蠅はのあゆみを
おもひ無なに見し

留守をもちるわれの机にえ少女のえ少男の蠅が
 ゑらぎ舞ふかも

秋の日の疊の上に飛びあよむ蠅の行ひ見つつ
 留守すも

入日さすあかり障子は薔薇色にうすら匂ひて
 蠅一つ飛ぶ

事なくて見ゐる障子に赤とんぼかうべ動かす
 羽さへふるひ

まもりゐのあかり障子にうつりたる蜻蛉は去
 りて何も来ぬかも

留守もりて入日あかけれ紙ふくる猫に冠せん
 とおもほえなくに

9 新年の歌

明治四十一年作

今しいま年の來るとひむがしの八百うづ潮に
 茜かがよふ

高ひかる日の母を戀ひ地の廻り廻り極まりて
 天新たななり

東海に破馭廬生れていく繼ぎの眞日美はしく
 天明けにけり

ひむがしの朱の八重ぐもゆ斑駒に乗りて來ら
 しも年の若子は

にひとしの眞日のうるはしくれなるを高きに
 上り目蔭して見つ

新装ふ日の大神の清明目を見まくと集ふ現し
もろもろ

天明り年のきたるとくだかけの長鳴鳥がみな
鳴けるかも

しだり尾の鶏の雄鳥が鳴く聲の野に遠音して
年明けにけり

ひむがしの空押し晴るし守らへる大和島根に
春立てるかも

うるはしと思ふ子ゆゑに命欲り夢のうつらと
年明けにけり

沖つとりかもかもせむと初春にこころ問して
見まくたぬしも

おほきみの大城おほきの森の濃緑こみどりのいやとこととはに
年ほぐらしも

豊酒みやびの屠蘇とそに吾るへば鬼子おにこども皆死しにけり
赤き青きも

くれなるの梅はよろしもあらたまの年の始に
見ればよろしも

10 雑

歌

明治四十一年作

あかときの畑はたけの土のうるほひに散れる桐の花
ふみて來にけり

青桐あきぎりのしみみ廣葉ひろはの葉かげよりゆふべの色は
ひろごるらしき

ひむがしのともしび二つこの宵も相寄らなく
てふけわたるかな

うつそみのこの世のくにに春さりて山焼くる
かも天の足夜を

ひさ方の天の赤瓊のほひなし遙けきかもよ
山焼くる火は

うつし世は一夏に入りて吾がこもる室の疊に
蟻を見しかな

眞夏日の雲のみね天のひと方に夕退きにつつ
かがやきにけり

荒磯ねに八重寄る波のみだれたちいたぶる中
の寂しさ思ふ

秋の夜の灯しづかに揺るる時しみじみわれは
耳かきにけり

ほそほそとこほろぎ鳴くに壁にもたれ膝に手
を組む秋の夜かも

旅ゆくいづみと泉いづみに下りて冷々ひやひやに我が口そそぐ月く
さのはな

11 鹽原行

明治四十一年作

晴れ透るあめ路の果てに赤城嶺の秋の色はも
更け渡りけり

小筑波を朝を見しかば白雲の凝れるかかむり
動くともせず

關屋いでて坂路になればちらりほらり染めた
る木々が見えきたるかも

おり上り通り過がひしうま二つ遙かになりて
尾を振るが見ゆ

山角にかへり見すれば歩み來し街道筋は細り
てはるけし

馬車とどろ角を吹き吹き鹽はらのもみづる山
に分け入りにけり

山路わだ紅葉はふかく山たかくいよよ逼り來
わがまなかひに

つぬさはふ岩間を垂るるいは水のさむざむと
して土わけ行くも

とうとうと喇叭を吹けば鹽はらの深染の山に
馬車入りにけり

湯のやどのよるのねむりはもみぢ葉の夢など
見つつねむりけるかも

夕ぐれの川べに立ちて落ちたぎつ流るる水に
おもひ入りたり

あかときを目ざめて居ればくだの音の近くに
止みぬ馬車着けるらし

床ぬちにぬくまり居れば宿つ女が起きねと云
へど起きがてぬかも

世のしほと言のたふとさ名に負へる鹽はらの
山色づきにけり

谷川の音をききつつ分け入れば一あしごとに
山あざやけし

山深くひた入り見むと露じもに染みし紅葉を
踏みつつぞ行く

三千尺の目下の極みかがよへる紅葉のそこに
水たぎち見ゆ

かへりみる谷の紅葉の明らけく天にひびかふ
山がはの鳴り

現し身が戀心なす水の鳴りもみちの中に籠り
て鳴るも

山川のたぎちのどよみ耳底にかそけくなりて
峰を越えつも

ふみて入るもみちが奥は横よこたはる朽ち木の下を
水ゆく音す

山がはの水のいきほひ大岩にせまりきはまり
音とどろくも

うつそみは常つねなけれども山川に映はゆる紅葉を
うれしみにけり

うつし身の稀らにかよふ秋やまに親したしみて鳴
く蟋蟀のこゑ

打ちわたす山の雑木ざふきの黄にもみち明あかるき峽なびに
道入りにけり

もみち原ゆふぐれしづむ蟋蟀はこの寂しさに
堪へて鳴くなり

つかれより美^{うつく}し夢^{ゆめ}に入る如き思ひぞ吾がする
蟋蟀のこゑ

もみち照りあかるき中に我が心空しくなりて
しまし居りけり

しほ原の湯の出でどころとめ來ればもみちの
赤き處なりけり

山の湯のみなもとどころ鐵^{かね}色^{いろ}にさびにけるか
な草もおひなく

鐵^{かね}さびし湯の源^{みなもと}のさ流に蟹がいくつも死にて
居たりし

あまつ日は山のいただきを照らしたりふかき
峽^{はざま}間の道のつゆじも

親馬おやうまにあまえつつ來る仔馬こにし心動きて過ぎ
がてにせり

あしびきの山のはざまの西開き遠とほくれなるに
夕焼くる見ゆ

橋のべのちひさ楓かへるてかへり路ぢになかくれなると
染めて居りけり

天地あつちのなしのまにまに寄り合へる貝の石あは
れとことばにして

ほり出いだすいはほのひまの貝の石ただ珍らしみ
ありがてぬかも

おくやまの深き岩いは間まゆ海つもの石と成り出づ
君に戀ふるとき

もみちばの過ぎしを思ひ繁き世に生きつるな
べに悲しみにけり

山峡のもみちに深く相こもりほれ果てなむか
峡のもみちに

もみち斑の山の真洞に雲おり來雲はをとめの
領巾漏らし來も

火に見ゆる玉手の動き少女らは何に天降りて
もみちをか焚く

天そそる白くもが上のいかし山夜見の國さび
月かたむきぬ

まぼろしにももの戀ひ來れば山川の鳴る谷際に
月満てりけり

12 折に觸れて 明治四十二年作

潮沫しほなみのはかなくあらばもろ共にいづべの方に
ほろびてゆかむ

やうらくの珠たまはかなしと歎なげかひし女をんなのこゝろ
うつらさびしも

宵あさくひとり籠ればうらがなし雨蛙あまがへるひとつ
かいかいと鳴くも

をさな妻つまこころに守り更けしづむ灯火ともしびの蟲を
殺してゐたり

かがまりて見つつかなしもしみじみと水湧き
居れば砂うごくかな

夏晴れのさ庭の木かげ梅の實のつぶらの影も
さゆらぎて居り

春はる闌たけし山やま峽がひの湯にしづ籠りた穂の芽食をしつつ
ひとを思はず

馬に乗り湯どころ來つつ白梅のととのふ春に
あひにけるかも

ひとり居て卵うでつつたぎる湯にうごく卵を
見ればうれしも

干ほし柿がきを弟の子に呉れ居れば淡あは々あはと思ひいづる
ことあり

ゆふぐれのほども雪路ゆきぢをかうべ垂れ濡れたる
靴をはきて行くかも

世のなかの憂^{うれ}苦^くも知らぬ女^めわらはの泣^なくこと
はあり涙^{なみだ}ながして

春の風ほがらに吹^ふけばひさかたの天^{あめ}の高^{たか}低^{ひく}に
風^{かぜ}が浮^うべり

萱^{くわん}ざうの小^こさき萌^もを見てをれば胸^{むね}のあたりが
うれしくなりぬ

青^{あお}山^{やま}の町^{まち}かげの田^での畔^{あき}みちをそぞろに來^きつれ
春^{はる}あさみかも

春^{はる}あさき小^こ田^たの朝^{あさ}道^{みち}あかあかと金^{かな}氣^け浮^うく水^{みづ}に
かぎろひのたつ

明^あけがたに近^{ちか}き夜^よさまのおのづから我^{わが}心^{こころ}にし
觸^ふるらく思^{おも}ほゆ

天竺てんじゆくのほとけの世より子らが笑あはにくからなく
て君も笑むかな

さみだれはきのふより降り行ま々ま子をほのぼの
やさしく聞く今宵こよひかも

八百や會あひのうしほ遠とほ鳴るひむがしのわたつ天明あま
雲くだるなり

13 細り身

明治四十二年作

重かりし熱の病のかくのごと癒えにけるかと
かひな撫なるも

蝸蟬かみのまちかくに鳴くあかつきを衰へはてて
ひとり臥ふし居り

あなうま粥強飯を食すなべに細りし息の太り
ゆくかも

おとろへて寢床の上にものおもふ悲しきかな
や蠅の飛ぶさへ

たまたまに現しき時はわが命生きたかりしか
このうつし世に

病みて思ふほのぼのとしてあり經たる和世の
我に悔は多かり

いはれ無に涙がちなるこのごろを事更ぶとも
ひと云ふらむか

しまし間も今の悶への酒狂になるを得ばかも
嬉しかるべし

閉づる目ゆ熱き涙のはふり落ちはふり落ちつ
つあきらめ兼ねつ

やみ恍惚おとろへにたれさ庭べに夕雨ふれば
嬉しくきこゆ

みちのくに我稚くて熱を病みしことを仄かに
思ひいでつも

おとろへし胸に眞手おき寂しめる我に聞ゆる
蝸のこゑ

熱落ちて衰へ出で來このごろの日八日夜八夜
は現しからなく

恣にやせ頬にのびし硬ひげを手ぐさにしつ
つさ夜ふけにけり

うそ寒くなりて目ざめし室の外は月清く照り
 鶏なくきこゆ

かうべあげ見れば狭庭の椎の木の間おほき月
 入るよるは静かに

ぬば玉のふくる夜床に目ざむればをなご狂の
 歌ふがきこゆ

日を繼ぎて現身さぶれ蟬の聲もいよよ清しく
 なりにけるかな

現身は悲しけれどもあはれあはれ命いきなむ
 とつひにおもへり

おのが身しいとほしければかほそ身をあはれ
 がりつつ飯食しにけり

火鉢べにほほ笑ひつつ花火する子供と居れば
われもうれしも

病みて臥すわが枕べに弟妹らがこより花火を
して呉れにけり

わらは等は汝兄の面のひげ振りのをかしなど
いひ花火して居り

平凡に堪へがたき性の童幼ども花火に飽きて
みな去りにけり



とめどなく物思ひ居ればさ庭べに未だいはけ
なく蟋蟀鳴くも

宵淺き庭を歩めばあゆみ路のみざりひだりに
蟋蟀鳴くも

つめたき土にうまれし蟋蟀のまだいはけなく
鳴ける寂しさ

さ庭べに何の蟲ぞも鉦うちて乞ひのむがごと
ほそほそと鳴くも

なにゆゑに花は散りぬる理法と人はいふとも
悲しくおもほゆ

たまゆらに灰觸れにけれ延ふ蔦の別れて遠し
かなし子等はも

いつくしく瞬きひかる七星の高天の戸にちか
づきにけり

神無月の土の小床にほそほそと亡びのうたを
 蟲鳴きにけり

うらがれにしづむ花野の際涯よりとほくゆく
 らむ霜夜こほろぎ

まひよひの露冷えまさる遠空をこほろぎの子
 らは死にて行くらむ

14 分 病 室

明治四十二年作

この度は死ぬかも知れずと思ひし玉ゆら氷枕
 の氷とけ居たりけり

隣室に人は死ねどもひたぶるに帚ぐさの實食
 ひたかりけり



熱落ちてわれは日ねもす夜もすがら稚な兒の
ごと物を思へり

のびあがり見れば霜月の月照りて一本松のあ
たまのみ見ゆ

熱落ちてわれは日ねもす夜もすがら稚な兒の
ごと物を思へり

のびあがり見れば霜月の月照りて一本松のあ
たまのみ見ゆ



明治四十三年

1 田螺と彗星

とほき世のかりようびんがのわたくし兒田螺
はぬるきみづ戀ひにけり

田螺はも背戸の圓田にゐると鳴かねどころり
ころりと幾つもあるも

わらくすのよごれて散れる水無田に田螺の殻
は白くなりけり

氣ちがひの面まもりてたまさかは田螺も食べ
てよるに寝ねたる

赤いろの蓮まる葉の浮けるとき田螺はのどに
みごもりぬらし

味憎うづの田螺たうべて酒のめば我が咽喉佛
うれしがり鳴る

ためらはす遠天に入れと彗星の白きひかりに
酒たてまつる

うつくしく瞬きてゐる星ぞらに三尺ほどなる
ははき星をり

2 をさな妻

墓はらのとほき森よりほろほろと上るけむり
 に行かむとおもふ

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさに
 づらふ時たちにはけり

をさな妻ころに持ちてあり経れば赤小蜻蛉
 の飛ぶもかなしき

目を閉づれすなはち見ゆる淡々し光に戀ふる
 もさみしかるかな

ほこり風立ちてしづまるさみしみを市路ゆき
 つつかへりみるかも

このゆふべ塀にかわけるさび紅のべにがらの
垂りをうれしみにけり

嘴あかき小鳥さへこそ飛ぶならめはるばる飛
ばば悲しきろかも

細みづにながるる砂の片寄りに静まるほどの
うれひなりけり

水さびるる細江の面に浮きふむこの水草は
うごかざるかな

汗ばみしかうべを垂れて抜け過ぐる公園に今
しづけさに會ひぬ

をさな妻ほのかに守る心さへ熱病みしより細
りたるなれ

3 悼堀内卓

堀内はまこと死にたるかありの世か
いめ世かくやしいたましきかも

信濃路のゆく秋の夜のふかき夜をなにを思ひ
つつ死にてゆきしか

うつそみの人の國をば君去りて何邊にゆかむ
ちちははをおきて

早はやも癒りて來よと祈むわれになにゆるに
逝きし一言もなく

いまよりはまことこの世に君なきかありと思
へどうつつにはなきか

深き夜のとづるまなこにおもかげに見えくる
友をなげきわたるも

霜ちかき蟲のあはれを君と居て泣きつゝ聞か
むと思ひたりしか (十月作)

明治四十四年

1 此の日頃

よるさむく火を警いましむるひようしぎの聞え來る
頃はひもじかりけり

こよひはいまだ淺宵あさよひなれど床ぬちのびつつ
何か考へむとおもふ

尺八しゃくはちのほろほろと鳴りて行く音も此世このよの涯はしに
遠ざかりなむ

入りつ日の赤き光のみなざらふ花野はなのはとほく
恍惚ぼんやり溶とくるなり

さだめなきものの魔まの來る如く胸むねゆらぎして
街まちをいそげり

うらがなしいかなる色の光ひかりはや我われのゆくへに
かがよふらむか

生くるもの我のみならず現まし身の死しにゆくを
聞きつつ飯食いひをしにけり

をさなごの獨ひとり遊ぶを見守りつつ心よろしく
なりてくるかも(二月作)

2 おく に

なにか言ひたかりつらむその言も言へなくな
りて汝は死にしか

はや死にて汝はゆきしかいとほしと命のうち
にいひにけむもの

終に死にて往かむ今際の目にあはず涙ながら
にわれは居るかな

なにゆゑに泣くと額なで虚言も死に近き子に
吾は言へりしか

うつし世のかなしき汝に死にゆかれ生きの命
も今は力なし

もろ足もかいほそりつつ死にし汝があはれに
なりてここに居りがたし

ひとたびは癒りて呉れよとうら泣きて千重に
いひしがつひに空しき

この世にし生きたかりしか一念も申さず逝き
しをあはれとおもふ

何も彼もあはれになりて思ひづるお國のひと
世はみぢかかりしか

せまりくる現實は悲ししまらくも漂ふごとき
ねむりにゆかむ

やすらなる眠もがもと此の日ごろ眠ぐすりに
親しみにけり

なげかひも人に知らえず極まれば何に縫りて
吾は行きなむか

しみ到るゆふべのいろに赤くゐる火鉢のおき
のなつかしきかも

現身のわれなるかなと歎かひて火鉢をちかく
身に寄せにけり

ちから無く鉛筆きればほろほろと紅の粉が落
ちてたまれり

灰のへにくれなるの粉の落ちゆくを涙ながし
ていとほしむかも

生きてゐる汝がすがたのありありと何に今頃
見えきたるかや(二月作)

3 うつし身

雨にぬるる廣葉細葉の若葉森あが言ふこゑの
やさしくきこゆ

いとまなき吾なればいま時の間の青葉の揺も
見むとしおもふ

しみじみとおのれ親しき朝じめり墓原の蔭に
道ほそるかな

やはらかに濡れゆく森のゆきすりに生の命の
吾をこそ思へ

よにも弱き吾なれば忍ばざるべからず雨ふる
よ若葉かへるで

うつしみは死しぬ此のごと吾は生きて夕いひ
食しに歸りなむいま

黒土に足駄の跡のつづけるを墓のほそみちに
かへり見にけり

うちどよむ衢のあひの森かげに残るみづ田を
いとしくおもふ

青山の町蔭の田の水さび田にしみじみとして
雨ふりにけり

森かげの夕ぐるる田に白きとり海とりに似し
ひるがへり飛ぶ

寂し田に遠來し白鳥見しゆるに弱ければ吾は
うれしくて泣かゆ

くわん草^{きくそう}は丈^{たけ}ややのびて濕^{しづ}りある土^{つち}に戦^{たたか}げり
このいのちはや

はるの日のながらふ光^{ひかり}に青^{あお}き色^{いろ}ふるへる麥^{あわ}の
嫉^{ねた}くてならぬ

春^{はる}淺^あき麥^{あわ}のはたけにうごく蟲^{むし}手^てぐさにはすれ
悲^{かな}しみわくも

うごき行く蟲^{むし}を殺^{ころ}してうそ寒^ふく麥^{あわ}のはたけを
横^{よこ}ざりにけり

いとけなき心^{こころ}葬^{はな}りのかなしさに蒲^{たん}公^{こう}英^{へい}を掘^ほる
せとの岡^{おか}べに

灰^{はい}かにも吾^{われ}に親^{おや}しき豫^{かね}言^{ごと}をいはまくすらしき
黄^きいろ玉^{たま}はな(四月五月作)

4 うめの雨

おのが身をいとほしみつつ歸り來る夕細道に
柿の花落つも

はかなき身も死にがてぬこの心君し知れらば
共に行きなむ

さみだれのけならべ降れば梅の實の圓大きく
ここよりも見ゆ

天に戦ぐほそ葉わか葉に群ぎもの心寄りつつ
なげかひにけり

かぎろひのゆふさりくれど草のみづかくれ水
なれば夕光なしや

ゆふ原の草かげ水にいのちいくる蛙かへるはあはれ
啼きたるかなや

うつそみの命は愛しとなげき立つ雨の夕原ゆふはらに
音鳴くものあり

くろく散る通草あひびの花のかなしさを稚をさなくてこそ
おもひそめしか

おもひ出も遠き通草の悲し花きみに知らえず
散りか過ぎなむ

道のべの細川もいま濁りみづいきほひながる
夜の雨ふり

汝な兄あよ汝な兄あたまごが鳴くといふゆゑに見に行
きければ卵が鳴くも

あぶなくも覺束おぼつかなけれ黄いろなる圓きうぶ毛
が歩みてゐたり

見てを居り心よろしも鶏の子はつ**い**ばみ乍ら
ゐねむりにけり

庭つとり鶏かひのひよこも心こころがなし生れて鳴けば
母にし似るも

乳のまぬ庭とりの子は自おのづから哀あはれなるかも
よ物食ものみにけり

常のごと心足らはぬ吾ながらひもじくなりて
今かへるなり

たまたまに手など觸れつつ添そひ歩む枳殼かき垣かきに
ほこりたまれり

ものがくれひそかに煙草すふ時の心よろしさ
のうらがなしかり

青葉空雨になりたれ吾はいまこころ細ほそと
別れゆくかも

天さかり行くらむ友に口寄せてひそかに何か
いひたきものを(五月六月作)

5 藏 王 山

藏王^{蔵王}をのぼりてゆけばみんなみの吾妻^{あづま}の山に
雲のゐる見ゆ

たち上^{のぼ}る白雲のなかにあはれなる山鳩啼けり
白くものなかに

ま夏日の日のかがやきに櫻實は熟みて黒しも
われは食みたり

あまつ日に目蔭をすれば乳いろの湛かなしき
みづうみの見ゆ

死にしづむ火山のうへにわが母の乳汁の色
みづ見ゆるかな

秋づけばはらみてあゆむけだものも酸のみづ
なれば舌觸りかねつ

赤蜻蛉むらがり飛べどこのみづに卵うまねば
かなしかりけり

ひんがしの遠空にして一すぢのひかりは悲し
荒磯しらなみ(八月作)

6 秋の夜ごろ

玉きはる命をさなく女童をいただき遊びき夜半
のこほろぎ

こよひもひとりねむるとうつらうつら悲しき
蟲に聞きほくるなり

ことわりもなき物怨み我身にもあるが愛しく
蟲ききにけり

少年の流されびとをいたましとこころに思ふ
蟲しげき夜に

秋なればこほろぎの子の生れ鳴く冷たき土を
かなしみにけり

少年の流され人はさ夜の
小床に蟲なくよ何の
蟲よといひけむ

かすかなるうれひにゆるるわが心蟋蟀聞くに
堪へにけるかな

蟋蟀の音にいつる夜の静けさにしろがねの錢
かぞへてゐたり

紅き日の落つる野^の末^{すゑ}の石^{いし}の間^まのかそけき蟲に
聞き入りにけり

足もとの石のひまより静けさに顫ひて出づる
こほろぎのこゑ

入りつ日の入りかくろへば露滿つる秋野の末
にこほろぎ鳴くも

うちどよむちまたを過ぎてしら露のゆふ凝る
原にわれは來にけり

星おほき花原くれば露は凝りみぎりひだりに
こほろぎ鳴くも

濠のみづ干ゆけばここに細き水流れ會ふかな
夕ひかりつつ

女の童をとめとなりて泣きし時かなしく吾は
おもひたりしか

さにづらふ少女ごころに酸漿の籠らふほどの
悲しみを見し

こほろぎはこほろぎゆるるに露原に音をのみぞ
鳴く音をのみぞ鳴く(九月作)

7 折に觸れて

なみだ落ちて懐しむかもこの室むろにいにしへ人
 は死に給ひにし（子規十周忌三首）

自みづかからをさげすみ果てし心すら此夜このよはあはれ
 和なごみてを居ぬ

しづかに眼めをつむり給ひけむ自みづかづからすべ
 は冷ひやたくなり給ひけむ

涙なみだながししひそか事も消ゆるかや吾われより秋な
 れば桔梗ききやうは咲きぬ（録三首）

きちかうのむらさきの花萎しほむ時わが身は愛はし
 とおもふかなしみ

さげすみ果てしこの身も堪へ難くなつかしき
ことありあはれあはれわが少女

栗の實の笑みそむるころ谿越えてかすかなる
灯に向ふひとあり(録三首)

かどはかしに逢へるをとめの物語あはれみに
つつ谿越えにけり

死に近き狂人を守るはかなさに己が身すらを
愛しとなげけり

照り透るひかりの中に消ぬべくも蟋蟀と吾と
なげかひにけり

つかれつつ目ざめがちなるこの夜ごろ寐より
さめ聞くながれ水かな

朝さざれ踏みの冷めたくあなあはれ人の思おもひの
湧ききたるかも

秋川のさゞれ踏み往き踏み來とも落ちぬ心
君知るらむか

土のうへの生けるものらの潜ひそむべくあな慌し
秋の夜の雨

秋のあめ煙りて降ればさ庭べに七しち面めん鳥とりは羽も
ひろげす

寒さむとひと夜の雨のふりしかば病める庭鳥
をいたはり兼ねつ

ほそほそとこほろぎの音はみちのくの霜ふる
國へとほ去りぬらむ

遠き世のガレノスは春のあけぼの
Ornamentum loci をかなしみぬ。われは
東海の國の伽羅の木かげ Plumula loci と
いひてなげかふ。

大正元年

山ふかき落葉のなかに光り居る寂しきみづを
われは見にけり

寒^{さむ}ざむとゆふぐれて来る山のみち歩^あめば路^{みち}は
濡^ぬれてゐるかな

1 睦岡山中

しづかなる眼のごときひかりみづ山の木原に
動かざるかも

われひとり山を越えつつ見入りたる水はする
どく寒くひかれり

都會のどよみをとほくこの水に口觸れまくは
悲しかるらむ

天さかる鄙の山路にけだものの足跡を見れば
こころよろしき

なげきより覺めて歩める山峽に黒き木の實は
こぼれ腐りぬ

寂しさに堪へて空しき吾の身に何か觸れて來
悲しかるもの

ふゆ山に潜みて木末のあかき實を啄みてゐる
鳥見つ今は

かせおこる木原をとほく入つ日のあかき光は
ふるひ流るも

赤光のなかの歩みはひそか夜の細きかほそき
こころにか似む（二月作）

2 木の實

しろがねの雪ふる山に人かよふ細ほそとして
路見ゆるかな

赤茄子の腐れてゐたるところより幾程もなき
歩みなりけり

満ち足らふ心にあらぬ谿谷つべに酔をふける
木の實を食むころかな

山遠く入りても見なむうら悲しうら悲しとぞ
人いふらむか

紅葦の雨にぬれゆくあはれさを人に知らえず
見つつ來にけり

山ふかく谿の石原しらじらと見え來るほどの
いとほしみかな

かうべ垂れ我がゆく道にぼたりぼたりと椽の
木の實は落ちにけらずや

ひとり居て朝の飯食む我が命は短かからむと
思ひて飯はむ(一月作)

3 或る夜

くれなるの鉛筆きりてたまゆらは慎しきかな
われのころの

をさな妻をとめとなりて幾百日こよひも最早
眠りゐるらむ

寝ねがてにわれ烟草すふ烟草すふ少女は最早
眠りゐるらむ

いま吾は鉛筆をきるその少女安心をして眠り
ゐるらむ

我友は蜜柑むきつつしみじみとはや抱きねと
いひにけらすや

けだものの暖かさうな寝すがた思ひうかべて
 獨り寝にけり

寒床にまろく縮まりうつらうつら何時のまに
 かも眠りあるかな

水のべの花の小花の散りどころ盲目になりて
 抱かれて呉れよ（二月作）

4 木こり

山腹の木はらのなかへ堅凝のかがよふ雪を踏
 みのぼるなり

ゆらゆらと空気を揺りて伐られたり斧の光れ
 ば大木ひとつと

斧ふりて木を伐る側に小夜床の陰のかなしさ
歌ひてゐたり

雪の上を行けるをみなは堅飯と赤子を背負ひ
うたひて行けり

雪のべに火がとろとろと燃えぬれば赤子は乳
をのみそめにけり

杉の樹の肌はだに寄ればあなかなしくれなるの油あぶら
滲しみみ出るかなや

はるばるも來つれこころは杉の樹の紅あけの脂あぶらに
寄りてなげかふ

みちのくの藏王ざうおうの山のやま腹にけだものと人
と生きにけるかも(二月作)

5 犬の長鳴

よる更けてふと握飯にぎりめしくひたくなり握飯にぎりめしくひぬ
寒がりにつつ

われひとりねむらむとしてゐたるとき外そとはこ
がらしの行くおときこゆ

遠く遠く流るるならむ灯ひをゆりて冬の疾風はっぴは
外面うへめんに吹けり

長鳴くはかの犬族けんぞくのなが鳴くは遠街とんがひにして火
かもおこれる

さ夜ふけと夜の更けにける暗黒あんこくにびようびよ
うと犬は鳴くにあらずや(二月作)

6 さみだれ

さみだれは何に降りくる梅の實は熟みて落つ
らむこのさみだれに

にはとりの卵の黄味の亂れゆくさみだれごろ
のあぢきなきかな

胡顔子の果のあかき色ほに出づるゆる秀に出
づるゆるゑに歎かひにけり(おくにを憶ふ)

ぬば玉のさ夜の小床にねむりたるこの現身は
いとほしきかな

しづかなる女おもひてねむりたるこの現身は
いとほしきかな

鳥の子のすもり暇すもりに果てむこの心もののおはれと云
はまくは憂うれし

あが友の古こ泉いづみ千ち櫛かは貧しけれさみだれの中を
あゆみゐたりき

けふもまた雨かひとりごちながら三州味噌
をあぶりて食はむも（六月作）

7 折々の歌

とろとろとあかき落おち葉は火ひもえしかば女めの男をの
童わらはあたりけるかも

雨ひと夜さむき朝あけを目めの下もとの死しなねばなら
ぬ鳥見て立てり

ひとよ寝し街の悲しきひそみ土ここに白霜は
降りてゐるかも

猫の舌のうすらに紅き手ざはりのこの悲しさを
知りそめにけり

ほのかなる茗荷の花を目守る時わが思ふ子は
はるかなるかも

をさな兒の遊びにも似し我がけふも夕かたま
けてひもじかりけり (研究至二首)

屈まりて脳の切片を染めながら通草のはなを
おもふなりけり

みちのくの我家の里に黒き蠶が二たびねぶり
目ざめけらしも (故郷三首)

障^{さば}りあらすな
みちのくに病む母^は上^うにいささかの胡瓜^きを送る

おきながさに脣^{くちびる}ふれて歸りしがあはれあはれ
いま思ひ出でつも

秋に入る練兵場^{れんべいぢやう}のみづたまりに小蜻蛉^{こあきつ}が卵を
生みて居りけり

曼珠沙華^{まんじゆしゃけ}ここにも咲きてきぞの夜のひと夜の
相^{すがた}おもほゆるかも

現身^{うつしみ}のわれをめぐりてつるみたる赤き蜻蛉^{あかきあきつ}が
幾つも飛べり

酒の糟あぶりて室^{むろ}に食^はむところ腎虚^{じんきよ}のくすり
尋ねゆくところ

けふもまた向ひの岡に人あまた群れゐて人を
葬りたるかな

何ぞもとのぞき見しかば弟妹らは龜に酒をば
飲ませてゐたり

太陽はかくろひしより海空に天の血垂りの雲
のたなびき

狂院に寝てをれば夜は温るし我がまちかくに
蟾蜍は啼きたり

伽羅ぼくに伽羅の果こもりくろき猫ほそりて
あゆむ夏のいぶきに

蛇の子は色くろぐるとうまれつつ石の間にも
かくろひぬらむ

ほそき雨墓原はかばに降りぬれてゆく黒土くろつちに烟草たばこの
吸殻すいごを投なぐ

墓はかばはらを白足袋しろあしひはきて行けるひと遠く小さく
なりにけるかも

萱草くわんそうをかなしと見つる目にいまは雨にぬれて
行く兵隊へいたいが見ゆ

墓はかばはらを歩み來きにけり蛇へびの子を見むと來つれ
ど春はるあさみかも

病院びやういんをいでて墓原はかばかげの土踏めつちふみば何なにになごみ
來きしあが心こころぞも

松風しょうふうの吹きあるところくれなるの提灯ていとうつけて
分け入いりにけり

8 夏の夜空

墓原に来て夜空見つ目のきはみ澄み透りたる
この夜空かな

なやましき眞夏なれども天なれば夜空は悲し
うつくしく見ゆ

きやう人を守りつつ住めば星のある夜ぞらも
久に見ずて経にけり

目をあげてきよき天の原見しかども遠の珍の
ここちこそすれ

ひさびさに夜空を見ればあはれなるかな星群
れてかがやきにけり

空見ればあまた星居りしかれども彌々^{いよいよ}とほく
ひかりつつ見ゆ

汗ながれてちまたの長路^{ながぢ}ゆくゆるにかうべ垂
れつつ行けるなりけり

ひさびさに星空^{ほしぞら}を見て居りしかば己^{おの}れ親^{した}しく
なりてくるかも(七月作)

9 土屋文明へ

おのが身をあはれとおもひ山みづに涙落しし
君を憶^{しの}ばむ

ものみな^すの體ゆるがごとき空戀ひて鳴かねば
ならぬ蟬^{せみ}のこゑ聞ゆ

もの書かむと考へるたれ耳ちかく蝸蟬なけば
あはれに聞ゆ

夕さればむらがりて來る油むし汗あえにつつ
殺すなりけり

かかる時菴羅あんらの木の實くひたらば心落居むと
おもふ寂しさ

むらさきの桔梗きやうのつぼみ割りたれば葎現れて
にくからなくに

秋ぐさの花さきにけり幾朝いくあさをみづ遣りしかと
おもほゆるかも

ひむがしのみやこの市路いちぢをひとつのみ朝草車あさくさぐるま
行けるさびしさ(七月作)

10 狂人守

うけもちの狂人も幾たりか死にゆきて折をり
あはれを感じるかな

かすかにてあはれなる世の相ありこれの相に
親しみにけり

くれなるの百日紅は咲きぬれど此きやうじん
はもの云はずけり

としわかき狂人守りのかなしみは通草の花の
散らふかなしみ

氣のふれし支那のをみなに寄り添ひて花は紅
しと云ひにけるかな

このゆふべ脳病院の二階より墓地見れば花も
見えにけるかな

ゆふされば青くたまりし墓みづに食血餓鬼は
鳴きかゝるらむ

あはれなる百日紅ひやくじつこうの下かげに人力車じんりきひとつ見
えにけるかな(九月作)

11 海邊にて

眞夏の日てりかがよへり渚なみさにはくれなるの玉
ぬれてゐるかな

海の香は山ふかき國くにに生うまれたる我のところに
染しまんとすらん

七夜ななよ寝て珠たまある海の香をかげば哀あはれなるかも
この香いとほし

白なみの寄するなぎさに林檎食む異い國こくをみな
はやや老いにけり

あぶらなす眞夏まなつのうみに落つる日の八尺やっさかの紅あけ
のゆらゆらに見ゆ

きこゆるは悲しきさざれうち浸ひたす潮波うしほなみとどろ
湧きたるならむ

岩かげに海ぐさふみて玉ひろふくれなるの玉
むらさき斑ふのたま

百鳥ももどりはいまだは啼かねわたつみは黒光りして
明けたるらむか

いささかの潮しほのたまりに赤きもの生きて居た
れば嬉しむかな

海の香はこよなく悲し珠ひろふわれのこころ
に染みにけるかも

櫻實さくらこの落ちてありやと見るまでに赤き珠ある
岩かげを來し

ながれ寄る沖つ藻見ればみちのくの春野はるの小草くさ
に似てを悲しも

荒磯あらいそべに歎くともなき蟹の子の常とこくれなるに
見ゆらむあはれ

かすかなる命いのちをもちて海つもの美うつくしくゐる荒あらい
磯いそべに來し

海のべを紅毛の子の走れるを心しづかに我は
見て居り

くれなるの三角の帆がゆふ海に遠ざかりゆく
ゆらぎ見えずも

月ほそく入りなむとする海の上ほの暗くして
舟なかりけり

ぬば玉のさ夜ふけにして波の穂の青く光れば
戀しきものを

けふもまた岩かげに來つ靡き藻に虎斑魚の子
かくろへる見ゆ

しほ鳴のゆくへ悲しと海のべに幾夜か寝つる
この海のべに(九月作)

12 郊外の半日

今しがた赤くなりて女中を叱りしが郊外に來
て寒さむけをおぼゆ

郊外はちらりほらりと人行きてわが息づきは
和なごむとすらん

郊外けがいに未だ落ちぬいまだころもて蟬せみ嘶なにぎれば
冷ひやたきものを

秋のかせ吹きてゐたれば遠とほかたの薄すすのなかに
曼珠沙華赤し

ふた本の松立てりけり下かげに曼珠沙華赤し
秋かせが吹き

いちめんの唐辛子畑に秋のかせ天より吹きて
鴉からすおりたつ

いちめんいに唐辛子あかき畑みちに立てる童わらわの
まなここ小さし

曼珠沙華咲けるところゆ相むれて現身うつしみに似ぬ
囚人は出づ

草の實はこぼれんとして居たりけりわが足元あしもと
の日の光かも

赭土はにはこぶ囚人の眼の光るころ茜さす日は傾
きにけり

トロッコを押す一人の囚人はくちびる赤し我われ
をば見たり

片方に松二もとは立てりしが囚はれ人は其處
を通りぬ

秋づきて小さく結りし茄子の果を籠に盛る家
の日向に蠅居り

女のわらは入日のなかに兩手もて籠に盛る茄
子のか黒きひかり

天傳ふ日は傾きてかくろへば栗煮る家にわれ
いそぐなり

いとまなきわれ郊外にゆふぐれて栗飯食せば
悲しこよなし

コスモスの闇にゆらげばわが少女天の戸に残
る光を見つつ (十月作)

13 葬り火

黄涙餘録の一

あらはなる棺ひつぎはひとつかつがれて穩田えんばしを
 今わたりたり

自殺じくせし狂者きやうしやの棺くわんのうしろより眩暈めまひして行け
 り道みちに入い日ひあかく

陸橋りくけにさしかかるとき兵來へいれば棺ひつぎはしまし地ち
 に置おかれぬ

まなこよりわれの涙なみだは漲はぶるとも人に知らゆな
 悲かなしきゆゑに

ひとねむるさ夜中よなにしてあな悲かなし狂人きやうじんの自殺じく
 果はてにけるはや

死なねばならぬ命いのちまもりて看護婦はしろき火
 かがぐ狂院のよるに

自みづからのいのち死なんと直ひたいそぐ狂人を守りて
 寝いねざるものを

土のうへに赤棟あかむね蛇遊へびあそびばすなりにけり入る日あ
 かあかと草はらに見ゆ

歩兵隊代々木あゆめいだいごぎのはらに群れゐしが狂人きやうじんのひつ
 ぎひとつ行くなり

赤光あかくわうのなかに浮びて棺くわんひとつ行き遙はるけかり野
 は涯はてならん

わが足より汗いでてやや痛みあり靴にたまり
 し土ほこりかも

火葬場に細みづ白くにごり來も向うにひとが
米を磨ぎたれば

死はも死はも悲しきものならざらむ目のもと
に木の實落つたはやすきかも

兩手をばズボンの隠しに入れ居たりおのが身
を愛しと思はねどさびし

葬り火は赤々と立ち燃ゆらんか我がかたはら
に男居りけり

うそ寒きゆふべなるかも葬り火を守るをここ
が欠伸をしたり

骨瓶のひとつを持ちて價を問へりわが口は乾
くゆふさり來り

納骨の箱は杉の箱にして骨がめは黒くならび
たりけり

上野なる動物園にかささぎは肉食ひゐたりく
れなるの肉を

おのが身しいとほしきかなゆふぐれて眼鏡の
ほこり拭ふなりけり

14 冬

來

黄涙餘録の二

自殺せる狂者をあかき火に葬りにんげんの世
に戦きにけり

けだものは食もの戀ひて啼き居たり何といふ
やさしさぞこれは

ベリカンの^{くちばし}の^{くちばし}嘴うすら赤くしてねむりけりかた
はらの^{みづ}水^{ひかり}光かも

ひたいそぎ動物園にわれは^き來たり人のいのち
をおそれて^き來たり

わが目より涙ながれて居たりけり鶴^{つる}のあたま
は悲しきものを

けだもののにほひを^かげば悲しくもいのちは
明^あく息^いづきにけり

支^し那^な國^{こく}のほそき^{せう}少女^{じゆう}の行きなづみ思ひそめに
しわれならなくに

さけび啼^なくけだもの^の邊^べに^{ひそ}潜みゐて赤き^は葬^{まう}り
の火こそ思へれ

鰐の子も居たりけりみづからの命死なんとせ
すこの鰐の子は

くれなるの鶴のあたまに見入りつつ狂人守を
かなしみにけり

はしきやし曉星學校の少年の頬は赤羅ひきて
冬さりにけり

泥いろの山椒魚は生きんとし見つつしをれば
しづかなるかも

除隊兵寫眞をもちて電車に乗りひんがしの空
明けて寒しも

はるかなる南のみづに生れたる鳥ここにゐて
なに欲しき啼く

15 柿乃村人へ 黄涙餘録の三

この夜ごろ眠られなくに心すら細らんとして
 告げやらましを

たのまれし狂者きやうじやはつひに自殺せりわれ現うつなく
 走りけるかも

友のかほ青ざめてわれにももの云はず今は如何
 なる世の相すがたかや

おのが身はいとほしければ赤棟蛇あかたけへびも潜みたる
 なり土の中なまふかく

世の色相いろさうのかたはらにゐて狂者きやうじやもり悲しき涙
 湧きいでにけり

やはらかに弱きいのちもくるぐろと甲よろはんと
してうつつともなし

寒ぞらに星ゐたりけりうらがなしわが狂院を
ここに立ち見つ

かの岡に瘋癲院のたちたるは邪宗じやしゅうらい來より悲し
かるらむ

みやこにも冬さりにけり茜あかねさす日向ひなたのなかに
髭剃りて居る

遠國えんごくへ行かば剃刀そりのひかりさへ馴れて親したしと
いへば歎なげかゆ (十一月作)

16 ひとりの道

霜ふればほろほろと胡麻こまの黒き實まの地つちにつく
なし今わかれなむ

夕ゆふ凝こりし露霜ふみて火を戀こひむ一人ひとりのゆるるに
こころ安やすけし

ながらふるさ霧きりのなかに秋花あきばなを我われ摘とまんとする
人に知らゆな

白雲は湧わきたつらむか我われひとり行いかむと思ふ
山のはざまに

神無かみな月空つきの際は涯てよりきたるとき眼めひらく花は
あはれなるかも

ひとりなれば心安けし谿ゆきて黒き木の實も
食ふべかりけり

ひかりつつ天を流るる星あれど悲しきかもよ
われに向はず

おのづからうら枯るる野に鳥落ちて啼かざり
しかも入日赤きに

いのち死にてかくろひ果つるけだものを悲し
みにつつ峽に入りつも

みなし兒の心のごとし立ちのぼる白雲の中に
行かむとおもふ

もみち斑に照りとほりたる日の光りはざまに
われを動かざらしむ

わが歩みここに極まり雲くだるもみぢ斑のな
かに水のみにけり

はるけくも山がひに來て白樺に觸りて居たり
冷たきその幹

ひさかたの天のつゆじもしとしとと獨り歩ま
む道ほそりたり (十一月作)

17 青山の鐵砲山

赤き旗けふはのぼらずどんたくの鐵砲山に小
供らが見ゆ

日だまりの中に同様のうなるらは皆走りつつ
居たりけるかも

銃丸じゆうぐらんを土より掘りてよろこべるわらべの側そばを
行き過ぎりけり

青竹あおたけを手に振りながら童子どうし来て何か落ちるぬ
面持おももちをせり

ゆふ日とほく金かねにひかれば群童ぐんどうは眼めつむりて
斜面しゃめんをころがりけり

群童ぐんどうが皆ころがれば丘かみのへの童女どうむすめかなしく笑
ひけるかも

いちにんの童子どうしころがり極まりて空見たるか
な太陽たいようが紅し

射的場てきばに細みづ湧きて流れければ童わらべふたりが
水のべに來し (十月作)

18 折に觸れて

くろぐろと圓つぶらに熟うるる豆ま柿がきに小鳥はゆきぬ
つゆじもはふり

藏ざう王わう山さんに雪かも降るといひしときはや斑はたらなり
といらへけらすや

狂者らは Paederastie をなせりけり夜しんしんと
更けがたきかも

ゴオガンの自畫像みればみちのくに山やま鷺こ殺し
しその目おもほゆ

をりをりは腦なう解剖かいかう書しよ讀むことありゆる知らに
心つつましくなり

水のうへにしらじらと雪ふりきたり降りきたり
りつつ消えにけるかも

身ぬちに重大ぢゆうだいを感せざれども宿直とくちのよるにう
なじ垂れるし

この里さとに大山おほやま大將住むゆるにわれの心の嬉し
かりけり(十二月作)

19 雪ふる日

かりそめに病みつつ居ればうらがなし墓はら
とほく雪つもある見ゆ

現身うつしみのわが血脈けちみやくのやや細り墓地はちにしんしんと
雪つもある見ゆ

あま霧し雪ふる見れば飯をくふ囚人のこころ
われに湧きたり

わが庭に鶯ら啼きてゐたれども雪こそつもれ
庭もほどろに

ひさかたの天の白雪ふりきたり幾とき経ねば
つもりけるかも

枇杷の木の木ぬれに雪のふりつもる心愛憐み
しまらくも見し

さにはべの百日紅のほそり木に雪のうれひの
しらじらと降る

天つ雪はだらに降れどさにづらふ心にあらぬ
心にはあらぬ (十二月作)

20 宮益坂

向うにも女をんなは居たり青き甕かめもち童子どうじになにか
いひつけしかも

馬に乗りて陸軍將校きたるなり女難むづかの相あひまか然
にあらじか (十二月作)

大正二年

われは床にねむりぬ
こよひはや學問がくもんしたき心起りたりしかすがに

雪こころのなかに日の落つる見ゆほのぼのと懺悔まんげの
心こころかなしかれども

1 さんげの心

風かぜひきて寝ねてゐたりけり窓まどの戸とに雪ゆきふる聞きゆ
さらさらといひて

あわ雪ゆきは消けなば消けぬがに降ふりたれば眼まなこ悲かなしく
消けぬらくを見みむ

腹はらばひになりて朱しゆの墨すみすりしころ七面鳥しちめんちうに泡あわ
雪ゆきは降ふりし

ひる日ひ中床なかとこの中なかより目をひらき何か見みつめん
と思おもほえにけり

雪ゆきのうへ照てる日ひ光くわうのかなしみに我われがつく息いきは
ながかりしかも

赤電あかでん車しゃにまなこ閉とづれば遠國えんこくへ流ながれて去いなむ
こゝろ湧わきたり

家いへゆりてとどろと雪はなだれたり今宵こよひは最早もはや
幾時いくときならむ

しんしんと雪ゆきふる最上もがみの上かみの山やまに弟あには無常むじやうを
感じたるなり

ひさかたの光ひかりに濡ぬれて縦たしゑやし弟あには無常むじやうを
感じたるなり

電燈でんとうの球たまにたまりしほこり見ゆすなはち雪は
なだれ果はてたり

天霧あまぎりらし雪ふりてなんぢが妻つまは細りつつ息いきを
つかむとすらし

あまつ日ひに屋上やじやうの雪かがやけりしづごころな
きいまのたまゆら

しろがねのかがよふ雪に見入りつつ何を求め
むとする心ぞも

いまわれはひとり言ひひたれども哀れあはれ
かかはりはなし

ゆふぐれて心せはしく街ゆけば街には女おほ
くゆくなり (二月作)

2 根岸の里

にんげんの赤子を負へる子守居りこの子守は
も笑はざりけり

日あたれば根岸の里の川べりの青蔭のたう揺
りたつらむか

か
が
よ
ふ
く
れ
た
け
の
根
岸
里
べ
の
春
淺
み
屋
上
の
雪
凝
り
て

我
は
見
ん
と
す
角
兵
衛
の
を
さ
な
童
の
を
さ
な
さ
に
足
を
と
ど
め
て

子
あ
ら
は
れ
に
け
り
笛
の
音
の
と
ろ
り
ほ
ろ
ろ
と
鳴
り
ひ
び
き
紅
色
の
獅



く
れた
たけの
根岸
里への
春
浅み
屋上の
雪
降りて
か
が
よ
ふ

角
兵衛
のを
さな
童
のを
さな
さに
足
をと
どめて
我
は
見
んと
す

笛
の
音
の
と
ろ
り
ほ
ろ
ろ
と
鳴
り
ひ
び
き
紅
色
の
獅
子
あ
ら
は
れ
に
け
り



いとけなき額ひたひのうへにくれなるの獅子ししの頭かぶを
持つあはれさよ

春のかせ吹きたるならむ目めのものとひかりの光ひかりのなか
に塵うごく見ゆ

ながらふる日光ひかりのなかひといろに我われのいのちの
めぐるなりけり (二月作)

3 きさらぎの日

狂院きやういんを早くまかりてひさびさに街まちをあゆめば
ひかり目に染しむ

平凡へいへんに涙をおとす耶蘇ヤソ兵士へいしあかきじやけつを
着きつつ來きにけり

きさらぎの天あまつひかりに飛ひ行かう船せんニコライ寺でらの
うへを走れり

杵きあまた竝ならべばかなし一い様やうにつぼの白米しろこめに落
ちにけるかも

もろともに天てんを見上みあげし耶蘇ヤソ士官しぐわんあかきじや
けつを着きたりけるかも

まぼしげに空に見入りし女あり黄色のふね天
馳せゆけば

二月ぞらに黄いろの船の飛べるときしみじみ
として女をぞおもふ

この身はも何か知らねどいとほしく夜おそく
ゐて爪きりにけり (三月作)

4 神田の火事

これやこの昨日の夜の火に赤かりし跡どころ
なれや烟立ち見ゆ

天明けし焼跡どころ燃えかへる火中に音の聞
えけるかも

亡ぶるものは悲しけれども目の前にかかれと
 てしも赤き火にほろぶ

たちのぼる灰燼のなかに黒眼鏡しろき眼鏡を
 賣るぞ寂しき

あきうどは眼鏡よろしと言あげてみづからの
 目に眼鏡かけたり (三月作)

5 口 ぶ え

このやうに何に顴骨たかきかや觸りて見れば
 をみななれども

この夜をわれと寝る子のいやしさのゆるゑ知ら
 ねども何か悲しき

目をあけてしぬのめぐろと思ほえばのびのび
と足をのばすなりけり

ひんがしはあけほのならむほそほそと口笛ふ
きて行く童子あり

あかねさす朝明ゆるゑにひなげしを積みし車に
會ひたるならむ (五月作)

6 おひろ 其の一

なげかへばものみな暗しひんがしに出づる星
さへあかからなくに

とほくとほく行きたるならむ電燈を消せばぬ
ばたまの夜も更けぬる

夜よくれば小こ夜よ床どに寝ねしかなしかる面おもわも今は
無なしも小こ床ども

かなしみてたどきも知らず浅草あさくさの丹塗にの堂どうに
われは來きにけり

あな悲かなし觀音くわんおん堂だうに癩らい者しゃゐてただひたすらに錢ぜに
欲ほりにけり

浅草あさくさに來きてうで卵たまご買かひにけりひたさびしくて
わが歸かへるなる

はつはつに觸ふれし子こゆゑにわが心こころ今は斑はたらに
嘆なげきたるなれ

代々よ木野ぎのをひた走りたりさびしさに生いの命いのちの
このさびしさに

さびしさびしいま西方さいほうにゆらゆらと紅あかく入る
日もこよなく寂し

紙屑しせつを狭庭せうていに焚たきけばけむり立つ戀こひしきひとは
遙とほかなるかも

ほろほろとのぼるけむりの天てんにのぼり消きえ果
つるかに我も消けぬかに

ひさかたの悲ひ天てんのもとに泣なきながらひと戀こひひ
にけりいのちも細く

放はなり投なげし風呂敷包ふろしきひろひ持ち抱だきてゐたり
さびしくてならぬ

ひつたりといたきて悲かなしひとならぬ癡ち癡ち學がくの
書なのかなしも

うづ高く積みし書物に塵たまり見の悲しもよ
たどき知らねば

つとめなればけふも電車に乗りにけり悲しき
ひとは遙かなるかも

この朝け山椒の香のかよひ来てなげくこころ
に染みとほるなれ

其の二

ほのぼのと目を細くして抱かれし子は去りし
より幾夜か経たる

愁ひつつ去にし子ゆるゑに藤のはな揺る光さへ
悲しきものを

しらたまの憂うれひのをみな我わがに來きたり流るるがごと
今は去りにし

かなしみの戀にひたりてゐたるとき白藤の花
咲き垂りにけり

夕やみに風たちぬればほのぼのと躑躅つづじの花は
散りにけるかも

おもひ出は霜ふる谿に流れたるうす雲の如く
かなしきかなや

あさぼらけひとめ見しゆゑしばだたくくろき
まつげをあはれみにけり

しんしんと雪ふりし夜にその指ゆびのあな冷つよたよ
と言ひて寄りしか

狂院の煉瓦のうへに朝日子のあかきを見つゝ
なげきけるかな

わが生れし星を慕ひしくちびるの紅きをみな
をあはれみにけり

わが命つひに光りて觸りしかば否といひつつ
消ぬがにも寄る

彼のいのち死去ねと云はばなぐさまめ我の心
は云ひがてぬかも

すり下す山葵おろしゆ滲みいでて垂る青みづ
のかなしかりけり

啼くこゑは悲しけれども夕鳥は木に眠るなり
われは寝なくに

其の三

愁^{うれ}へつつ去^いにし子ゆるゑに遠山^{とほやま}にもゆる火ほど
の我^あがこころかな

あはれなる女^{をみな}の臉^{まぶた}戀ひ撫でてその夜ほとほと
われは死にけり

このこころ葬^{まう}らんとして來^{きた}りつる畑^{はたけ}に麥は赤
らみにけり

夏^{なつ}されば農園^{のうえん}に來て心ぐし水すましをばつか
まへにけり

藻^ものなかに潜^{ひそ}むるもりの赤き腹はつか見そめ
てうつつともなし

麥の穂に光のながれたゆたひて向うに山羊は
啼きそめにけり

この心葬り果てんと秀の光る錐を壘に刺しに
けるかも

わらじ蟲たたみの上に出で來しに烟草のけむ
りかけて我居り

念々にをんなを思ふわれなれど今夜もおそく
朱の墨するも

この雨はさみだれならむ昨日よりわがさ庭べ
に降りてゐるかも

つつましく一人し居れば狂院のあかき煉瓦に
雨のふる見ゆ

瑠璃いろにこもりて圓き草の實は悲しき人の
まなこなりけり

ひんがしに星いづる時汝が見なばその目ほの
ほのとなしくあれよ (五月六月作)

7 死にたまふ母 其の一

ひろき葉は樹にひるがへり光りつつかくろひ
につつしづ心なけれ

白ふちの垂花ちればしみじみと今はその實の
見えそめしかも

みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんと
ぞただにいそげる

うちひさす都の夜にともる灯のあかきを見つ
つころ落ちるす

ははが目を一目を見んと急ぎたるわが額のへ
に汗いでにけり

灯あかき都をいでてゆく姿かりそめの旅と人
見るらんか

たまゆらに眠りしかなや走りたる汽車ぬちに
して眠りしかなや

吾妻やまに雪かがやけばみちのくの我が母の
國に汽車入りにけり

朝さむみ桑の木の葉に霜ふりて母にちかづく
 汽車走るなり

沼の上にかざろふ青き光よりわれの愁うれへの來こむ
 と云ふかや 白龍湖

上かみの山やまの停車場ていしやうに下り若わかくしていまは鰈やま夫をの
 おとうとを見たり

其の二

はるばると薬くすりをもちて來こしわれを目ま守もりたま
 へりわれは子こなれば

寄り添へる吾まを目ま守もりて言いひたまふ何かいひ
 たまふわれは子こなれば

長押なる丹ぬりの檜に塵は見ゆ母の邊の我が
朝目には見ゆ

山いづる太陽光を拜みたりをだまきの花咲き
つづきたり

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ
天に聞ゆる

桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ
母呼びにけり

死に近き母が目に寄りをだまきの花咲きたり
といひにけるかな

春なればひかり流れてうらがなし今は野のべ
に蟻子も生れしか

死に近き母が額ひたひを撫なりつつ涙ながれて居たり
けるかな

母が目をしまし離かれ来て目守まもりたりあな悲し
もよ蠶かぶこのねむり

我わが母はよ死にたまひゆく我わが母はよ我わを生なまし
乳足ちたらひし母はよ

のど赤あかき玄鳥つばくらめふたつ屋梁はりにゐて足乳根たらちねの母は
死にたまふなり

いのちある人あつまりて我わが母はのいのち死し行ゆ
くを見たり死しゆくを

ひとり来て蠶かぶこのへやに立ちたれば我わが寂さしさ
は極たぎまりにけり

其の三

檜ひのき若わか葉はてりひるがへるうつつなに山やま簗こは青く
生あれぬ山やま簗こは

日のひかり斑はたらに漏りてうら悲かなし山やま簗こは未いまだ
小さかりけり

葬はなり道みちすかんぼの華はなほほけつつ葬はなり道みちべに散
りにけらずや

おきな草くさ口くちあかく咲く野の道に光ながれて我われ
ら行きつも

わが母を焼かねばならぬ火を持てり天あまつ空そらに
は見るものもなし

星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とははそはの母
は燃えゆきにけり

さ夜ふかく母を葬りの火を見ればただ赤くも
ぞ燃えにけるかも

はふり火を守りこよひは更けにけり今夜の天
のいつくしきかも

火を守りてさ夜ふけぬれば弟は現身のうたか
なく歌ふ

ひた心目守らんものかほの赤くのぼるけむり
のその煙はや

灰のなかに母をひろへり朝日子のぼるがな
かに母をひろへり

落の葉に丁寧にあつめし骨くづもみな骨瓶こつびんに
入れしまひけり

うらうらと天てんに雲雀は啼きのぼり雪斑はだらなる
山に雲ゐす

どくだみも薊あざみの花も焼けるたり人葬所ひたしどの天明あけ
けぬれば

其の四

かぎろひの春なりければ木の芽みな吹き出づ
る山へ行きゆくわれよ

ほのかなる通草あけびの花の散るやまに啼く山鳩の
こゑの寂しさ

山かげに雉子が啼きたり山かげに湧きづる湯
こそかなしかりけれ

酸^すき湯に身はかなしくも浸^{ひた}りゐて空にかがや
く光を見たり

ふるさとのわぎへの里にかへり来て白ふぢの
花ひでて食ひけり

山かげに消^けのこる雪のかなしさに笹かき分け
て急ぐなりけり

笹原をただかき分けて行き行けど母を尋ねん
われならなくに

火のやまの麓にいつる酸^まの湯^ゆに一夜^{ひとよ}ひたりて
かなしみにけり

ほのかなる花の散りにし山のべを霞ながれて
行きにけるかも

はるけくも峽はざまのやまに燃ゆる火のくれなると
我が母と悲しき

山腹にとほく燃ゆる火あかあかと煙はうごく
かなしかれども

たらの芽を摘みつつ行けり山かげの道ほそり
つつ寂しく行けり

寂しさに堪へて分け入る山かげに黒々くろくろと通草あけび
の花ちりにけり

見はるかす山腹なだり咲きてゐる辛夷こぶしの花は
ほのかなるかも

藏王山に斑ら雪か
もかがやくと夕さり
くれれば
岨ゆきにけり

しみじみと雨降り
ゐたり山のべの土
赤くして
あはれなるかも

遠天を流らふ雲に
たまきはる命は無
しと云へ
ばかなしき

やま峽に日はとつ
ぷりと暮れゆきて
今は湯の
香の深くただよふ

湯どころに二夜ね
むりて尊菜を食へ
ばさらさ
らに悲しみにけり

山ゆるるに笹竹の
子を食ひにけり
ははそはの母
よははそはの母よ
(五月作)

8 みなづき嵐

どんよりと空は曇りて居りしとき二たび空を
見ざりけるかも

わが體たいにうつうつと汗にじみゐて今みな月の
嵐ふきたつ

わがいのち芝居しばに似ると云はれたり云ひたる
をとこ肥りゐるかも

みなづきの嵐のなかに顫ふるひつつ散るぬば玉の
黒き花みゆ

狂院きやういんの煉瓦の角かどを見ゐしかばみなづきの嵐ふ
きゆきにけり

狂じや一人蚊帳よりいでてまぼしげに覆盆子
 食べたしといひにけらすや

ながながと廊下を來つついそがしき心湧きた
 りわれの心に

蚊帳のなかに蚊が二三疋ゐるらしき此寂しさを
 告げやらましを

ひもじさに百日を経たりこの心よるの女人を
 見るよりも悲し

目を吸ひてくろぐろと咲くダアリヤはわが目
 のもとに散らざりしかも

かなしさは日光のもとダアリヤの紅色ふかく
 くろぐろと咲く

うつうつと濕り重たくひさかたの天低くして
動かざるかも

たたなはる曇りの下を狂人はわらひて行けり
吾を離れて

デアリヤは黒し笑ひて去りゆける狂人は終りに
かへり見すけり (六月作)

9 麥 奴

病監びやうかんの窓のしたびに紫陽花あざみが咲き折をりをり風は
吹き行きにけり

いそぎ来て汗ふきにけり監獄のあかき煉瓦に
降ふれるさみだれ

飯いひかしく煙けかりならむと鉛筆の秀ほを研きながらひ
とりおもへり

監房より今しがた來し囚人しうじんはわがまへにゐて
すこし笑あはみつも

光もて囚人の瞳ひとみてらしたりこの囚人を觀みざる
べからず

紺いろの囚人の群ぐん笠かむり草刈るゆゑに光る
その鎌

監獄に通ひ來しより幾日經し蝸かくな啼きたり二つ
啼きたり

まはりみち畑にのぼればくるぐろと麥むぎのくろみ奴は棄
てられにけり (七月作)

10 七月二十三日

過ぎ行きにけり
めん雞ら砂あび居たれひつそりと剃刀研人は

夏休日われももらひて十日まり汗をながして
なまけてゐたり

たたかひは上海に起り居たりけり鳳仙花紅く
散りゐたりけり

十日なまけけふ来て見れば受持の狂人ひとり
死に行きて居し

鳳仙花かたまりて散るひるさがりつくづくと
われ歸りけるかも (七月作)

11 屋上の石

あしびきの山の峽はざまをゆくみづのをりをり白く
たぎちけるかも

しら玉の憂うれひのをんな戀ひたづね幾やま越えて
來りけむかも

鳳仙花城あとに散り散りたまる夕ゆふかたまけて
忍び來にけり

天そそるやまのまほらに夕ゆふよどむ光を見つつ
あひ歎なげきつも

屋上やじやうの石は冷めたしみすすかる信濃のくにに
我は來にけり

屋根の上に尻尾動かす鳥來りしばらく居つつ
飛びにけるかも

屋根踏みて居ればかなしもすぐ下の店に卵を
敷へゐる見ゆ

屋根にゐて微けき憂湧きにけり目したの街の
なりはひの見ゆ (七月作)

12 悲報來

七月三十日夜、信濃國上諏訪に居りて、伊藤左千夫先生逝
去の悲報に接す。すなはち予は高木村なる島木赤彦宅
へ走る。時すでに夜半を過ぎぬたり。

ひた走るわが道暗ししんしんと慄へかねたる
わが道くらし

すべなきか螢ほたるをころす手のひらに光つぶれて
せんすべはなし

ほのぼのとおのれ光りてながれたる螢ほたるを殺す
わが道くらし

氷室ひむろより氷こほりをいだし居る人はわが走る時もの
を云はざりしかも

氷きるをとこの口のたばこの火赤あかかりければ
見て走りたり

死にせれば人は居ぬかなと歎なげかひて眠り薬を
のみて寝んとす

赤彦あかひこと赤彦が妻吾あに寝よと蚤とり粉こなを呉れに
けらすや

罌粟はたの向うに湖の光りたる信濃のくにに
目ざめけるかも

諏訪のうみに遠白く立つ流波つばらつばらに
見んと思へや

あかあかと朝焼けにけりひんがしの山竝の空
朝焼けにけり (七月作)

13 先師墓前

ひつそりと心なやみて水かくる松葉ぼたんは
きのふ植ゑにし

しらじらと水のなかよりふふみたる水ぐさの
花小さかりけり (八月作)

赤

光

をばり

「赤光」初版跋

○明治三十八年より大正二年に至る足かけ九年間の作八百三十三首を以て此一卷を編んだ。たまたま伊藤左千夫先生から初めて教をうけた頃より先生に死なれた時までの作になつてゐる。アララギ叢書第二編が予の歌集の割當に當つた時、予は先づ此一卷を左千夫先生の前に捧呈しようと思つた。而して、今から見ると全然棄てなければならぬ様なひどい作迄も輯録して往年の記念にしようとした。特に近ごろの予の作が先生から褒められるやうな事は殆ど無かつたゆゑに、大正二年二月以降の作は雑誌に發表せず此歌集に收めてから是非先生の批評をあふがうと思つて居た。ところが七月卅日の、この歌集編輯がやうやく大正二年度が終つたばかりの時に、突如として先生に死なれて仕舞つた。ネ

れ以來氣が落つかず、清書するさへものうくなつて、後半の順序の統一しないのもその儘におくやうになつたのは其爲めである。はじめの心と今の心と何といふ相違であらう。それでもどうか歌集は出来上がった。悲しく予は此一巻を先生の靈前にささげねばならぬ。

○平福百穂、木下杢太郎の二氏が特に本書のために繪を賜はつた事を予は光榮に思つてゐる。そのうち木下杢太郎氏の佛頭圖は明治四十三年十月三田文學に出た時分から密かに心に思つて居たものである。このたび予の心願かなつて到々予のものになつたのである。また、本書發行に就いて予を勵まし便利を與へられた長塚節、島木赤彦、中村憲吉、蕨桐軒、古泉千樞の諸氏並びに信濃諸同人に對し、又「とうとうと喇叭を吹けば」の句を呉れた清水謙一郎氏に對し感謝の念をささげねばならぬ。

○文法の誤の数々所あること。送假名法の一定せざること。漢字使用法の曖昧な

ること等は、億劫な爲めにその儘にして置いた。本書の作物は今ごろ發行して讀んでもらふのには、工合の悪いのが多い。併し同じく讀んでもらふうへは自分に比較的親しいのを讀んでもらほうと思つて、新しい方を先にした。はじめの方を一寸讀んで頂くといふ心持である。本書は予のほじめての歌集である。世の先輩諸氏からいろいろ教へて頂いてもつと勉強したい。

○本書の「赤光」といふ名は佛說阿彌陀經から採つたのである。彼の經典には「池中蓮華大如車輪青色青光黄色黄光赤光赤色白光白光微妙香潔」といふところがある。予が未だ童子の時分に遊び仲間には法師が居て切りに御經を誦誦して居た。梅の實をひるふにも水を浴びるにも「しゃくしき、しゃくくわう、びやくしき、びやくくわう」と誦して居た。「しゃくくわう」とは「赤い光」の事である。と知つたのは東京に来て、新刻訓點淨土三部妙典といふ赤い表紙の本を買つた時分であつて。あだかも露伴の「日輪すでに赤し」の句を發見して嬉しく思つ

たころであつた。それから繰つて見ると明治三十八年は予の廿四歳のときである。大正二年九月二十四日よりする。

「赤光」再版に際して

○多忙の身の上の故に「赤光」の歌も初版校正出来しみじみと繰讀せずを経た。「赤光」の初版發行は大正二年十月である。いま初版が賣切れて再版發行の運に到つたと聞くと、何となく嬉しい心が湧く。「赤光」の歌は私の敬愛する先輩諸氏からも遠國土に住むまだ知らない人々からも愛されて、さうして私は少し有名になつた。

○おもふに短歌のやうな體の抒情詩を大つびらにするといふことは、切腹面相を見るうなものであるかも知れない。むかしの侍は切腹して臍腑も見せて

ある。さうして西人は此ころを *besondere Ereignisse* などいふ語の内容に關聯せしめてもの言つてゐるが、「赤光」發行當時の私のころは、少し色合が違つてゐた。大正元年九月の歌

銀 錢 光

とりいだす紙つゝみよりあらはるゝ銀貨のひかりかなしかりけれ
電燈をひくゝおろしてしるがねの錢かぞふればこほるきが暗く
さ夜ふけと夜はふけぬらし銀の錢かぞふればその音ひゞきたるかな
わがまなこ當面に見たり疊をばころがり行きし銀錢のひかり
しみじみと紙幣の面をながめたりわきて氣味わるきものにはあらず
などがある。當時雜誌アララギの會計係であつた私は、常にアララギの賣行を氣にしてゐた。その後アララギはだんだん發行を續けて倒れずにある。私の微かな歌集赤光がアララギとどういふ關係に立ちそれが如何に續いて來たかを念ふ

ときいろいろの追憶が湧いてくる。

○白面の友がきて、「赤光」は大正初年以後の短歌界に小さいながら一期を劃すやうに働掛けたと言放つ。私はその詞に對つてゐて苦笑もしない。ある夜、現歌壇の一部の Schematismus に對して「赤光」がいかに働掛けたかを思つたときいたく眉間を覺めた。けれどもかかることは私の關するところではない。「赤光」は過去時に於ける私の悲しい命の捨どころであつた。

○歌づくりを現世出世の道とおもふな。そしてなほ歌をつくつてゐる。西國觀世音の札所を巡つて來た故里の老いたる父は「茂吉は歌などつくるさうだな」と云つた。それから田植が忙しいからと云つて歸國した。いまは故里に梅の實黄に落ち、蠶は繭になり、その繭は絹糸になつて、藏王山の雪はだらに、それが消え、通草の實いよいよふくれて、大自然といへども刻々に變化してやむ時がない。「赤光」の再版に際して心に浮んだ斷片を書きつけ置く。大正四年七月一日

夜青山 て茂吉しるす。

「赤光」三版に際して

「赤光」が賣切れて第三版を發行するといふことを東雲堂主人が通知して知た。私は嬉しいと思つた。そこで久々で「赤光」の歌を讀んでみた。いかにも不満な歌が多いので今更かなしんでゐる。かつてはいつともりで居つたのであつて、それが今は駄目である。私は自分で少しづつ直したいと思つたけれども、その暇がない、それゆゑに耻かしいけれども元の儘で第三版を發行し、私の歌を讀まれたかたがたに感謝して居る。大正七年四月廿三日。長崎にて齋藤茂吉記。

改選「赤光」跋

「赤光」の第五版が品切になつてからもう一年ぐらゐになるさうである。第三版を發行するとき、僕は長崎にゐて「赤光」の歌の不滿なのをところどころ象嵌して直さうとしたが、忙しいので果さなかつた。大正九年十月の丁度今ころである。僕は「あらたま」の編輯を終へてからその原稿を東京へ送つて、西浦上村六枚板といふところに轉地した。そこに五日間ばかりあるうち、夜のひまひまに油煙のたつランプのもとで、「赤光」の歌の餘りひどいのを直し或は削つた。それも長い間その儘になつてゐたが、やうやく大正十年九月すゑになつて、大いそぎで淨書し、順序を換へて舊い歌の方を先きにし、「あらたま」と體裁を揃へることにして、いよいよ改選「赤光」を發行することになつた。「赤光」の歌は

既にいろいろの書物に引用せられたけれども、今後「赤光」の歌を論ぜられる場合には、改選「赤光」の方に據つてもらひたいと思ふ。しかし直した歌が皆氣に入つてゐるといふのではない。不滿の氣持は依然としてあるけれども、さう濫りには直すことをしない。僕の外遊の日は既に迫つた。僕は端的に改選「赤光」の前途を祝福する。大正十年十月十日。齋藤茂吉。東京青山にて。

改選「赤光」第三版跋

○大正十年十一月に「赤光」を改選して發行したが、大正十二年九月一日の大震災で紙型も何も焼けてしまった。それから、發行書肆東雲堂は大地震以後方針を替へたので、「赤光」の成行もそのままになつてゐた。

○しかるに此の度、春陽堂の小峰八郎氏の骨折により、それから東雲堂主人西村陽吉氏の承諾を得て、改選「赤光」を春陽堂から發行することになつた。春陽堂發行のものには、先師の「左千夫全集」があり、長塚節のものがあり、僕のものも數種あるから、「赤光」もそこに纏めておくことは僕にもやはり氣持がいゝ。

○このたびの改選「赤光」は大正十年版のものと同じであるが、大正十年版の誤植を二三改め、句を二つばかり變へた。それを念のためこゝに書くならば、

誤
炎 口
亡 者

恍惚 溶く

正
炎 口
亡 者

恍惚 溶く

である。それから「人間は馬牛となり」は「人間は牛馬となり」であり、「弟は現身のうた歌ふ悲しく」をば、「弟は現身の歌悲しくうたふ」とした。それくらゐに過ぎない。

○「赤光」の初版發行は大正二年で、もう一昔前である。初版發行當時にはいろいろ同情して頂いたので、「赤光」は僕を有名にした歌集である。それゆゑ思出もなかなか深く、また同情して頂いた方々を忘却せざらむことを欲してゐる。

○初版當時、表紙や挿繪のことで西村陽吉氏をいろいろ煩はしたことを想起する。このたびもやはり表紙や挿繪のことで小峰八郎氏を随分煩はした。實に果

敢ない事にのみ骨折るやうであるが、それは僕の性分であらうか。
 ○僕はおもひがけなく火事で不幸に陥つたけれども、みづからを謹んで、神明を怨むことをしない。そして一人心しづかに、この「赤光」の前途を祝福しようとおもふ。大正十四年六月廿二日。東京青山にて齋藤茂吉しるす。

○なほ。大正十年版の誤植中には、二〇頁第一首、『ゆらに咲きまく』は『ゆらに吹きまく』二七頁第二首『雲みそむ見ゆ』は『雲ひそむ見ゆ』の誤である。八四頁第二首『よるいねにけり』は『よるに寝ねたる』である。今度誤植がないつもりであるが、これを以て「赤光」の定本としたい。校正には武藤善友君の助力をあふいだ。

◆圖書目錄進呈……往復葉書にて御申越次第……春陽堂

著者檢印



大正二年十月十五日發行
 大正四年七月三日再發行
 大正七年五月二十四日改選發行
 大正八年十一月七日改選發行
 大正十四年八月十五日改選發行

歌集赤光
 金貳圓六拾錢

著者 齋藤茂吉

發行者 和田利彦
 東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者 上村新輔
 東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博文館印刷所
 株式會社
 東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 春陽堂
 東京市日本橋區通四丁目五番地

電話 大手一四五
 振替東京一六一七〇番

アララギ叢書目次

第十編	第九編	第八編	第七編	第六編	第五編	第五編	第四編	第三編	第二編	第一編
齊藤茂吉著	長塚節著	島木赤彦著	齊藤茂吉著	中村憲吉著	齊藤茂吉著	齊藤茂吉著	島木赤彦著	古泉千樞著	齊藤茂吉著	島木赤彦合著 中村憲吉著
あらたま	長塚節歌集	氷魚	童馬漫語	林泉集	續短歌私鈔	短歌私鈔	切火	屋上の土	赤光	馬鈴薯の花
定價 貳圓六拾錢	定價 貳圓七拾錢	定價 貳圓五拾錢	定價 貳圓八拾錢	定價 貳圓貳拾錢	定價 貳圓壹拾錢	定價 貳圓壹拾錢	定價 貳圓壹拾錢	定價 貳圓六拾錢	定價 貳圓六拾錢	定價 貳圓壹拾錢

第十一編	伊藤左千夫著	左千夫全集	春 假 堂 發行
第十二編	松倉米吉著	松倉米吉歌集	古 今 各 書 院 發行
第十三編	土田耕平著	青杉	古 今 各 書 院 發行
第十四編	石原純著	爨日	古 今 各 書 院 發行
第十五編	中村憲吉著	しがらみ	古 今 各 書 院 發行
第十六編	島木赤彦著	歌道小見	古 今 各 書 院 發行
第十七編	アララギ發行所編	灰燼集	大正十二年 震災歌集 古 今 各 書 院 發行
第十八編	島木赤彦著	太虚集	古 今 各 書 院 發行
第十九編	村上成之著	翠微	近 刊
第二十編	土屋文明著	ふゆくさ	古 今 各 書 院 發行
第二十一編	以下續刊		古 今 各 書 院 發行

